

ハイパーネットワークワークショップ2019



# 地域社会を元気にする ネクストモビリティ

*Himeshima : The Leading Global Village with Next Mobility*

めざそう！グローバル・ビレッジ グローバル・ネクストモビリティ

## 報 告 書

- ・日 時 平成31年2月1日（金）～ 2月2日（土）
- ・会 場 大分県姫島村 離島開発総合センター やはず

## はじめに このワークショップの経緯と意義

姫島でハイパーネットワーク・ワークショップを開催することは、数年来の念願でした。

2015年に大分市で開催した別府湾会議「つくろう新たなソーシャル・モビリティ」の準備の際、偶然目にした新聞で、「姫島で電気自動車によるエコツーリズム開始」といった趣旨の記事を読んだことが発端でした。

人口2000人の島に「エコツーリズム」が生まれるのは、優れた発想と実行力の持ち主がいるからに違いないと思い、同僚に調べてもらいました。その結果、「いました！」と紹介されたのが、対岸・中津市に本社を置くT・プランの寺下満社長でした。さっそくお会いしたところ、寺下さんは姫島村出身で、ダイハツ大阪工場のプレスラインの技術者で、ダイハツが中津工場を立上げる時に会社からの依頼でJターンされた方でした。人口減少中の故郷を活性化させるために、非営利で電気自動車をレンタルする「姫島エコツーリズム推進協議会」を立ち上げられたのでした。

寺下さんには、別府湾会議の準備にご尽力いただき、とくに姫島で走っている超小型モビリティ、日産の「ニューモビリティコンセプト」を会場の大分県立芸術文化短期大学まで運んでいただき、参加者に試乗してもらうことができました。

この別府湾会議に集まったメンバーのなかから、「せっかくモビリティで新しい取り組みをしている仲間が、このまま解散するのはもったいない」という声が上がりました。同じ頃、『<小さい交通>が都市を変える』という本を書かれた大野秀敏さん、斎藤せつなさんとも知り合い、互いの発想に共通点が多いことを発見、意気投合していました。

こうして「ネクストモビリティ・コミュニティ」が生まれました。大野さん、斎藤さんらに加えて、別府湾会議のメンバーからは、T・プランの寺下さん、北九州で駐輪場から電気自動車や自転車のライドシェア・サービスまで、新しいモビリティ推進に取り組むNPO「タウンモビリティ・ネットワーク北九州（現在はI-DO）」の濱田千夏さん、北九州のコワーキング・スペース「秘密基地」の仕掛け人で、プロのファシリテーターの渋谷健さん、交通事故で歩行困難になりながら、デジタル工作機を活用する「ファブラボ」の活動に目覚め、電動スクーターを自作した倉本義介さん、そして会津が加わりました。

ネクストモビリティ・コミュニティの初仕事が、2016年夏、長野県軽井沢町での「G7交通大臣会合」の併設イベント「ネクストモビリティ・バザール2016 in かるいざわ」で、足漕ぎ型車椅子から最高速度19kmの電動バスまで、<小さい交通>を体現する様々なモビリティを集め、展示・試乗、会議、ワークショップなど盛りだくさんの活動をしました。交通政策研究者で筑波大学の石田東生さん、「コネクテッ

ド・カー」の国際標準化に取り組む沖電気の千村保文さん、トヨタの超小型モビリティ i-ROAD の開発主査の谷中壮弘さん、IoT を推進するインターネット協会理事長の藤原洋さんらが、すべて手弁当で駆けつけてくださいました。

翌 2017 年夏、富山県黒部市で「ネクストモビリティ・バザール 2017 in 黒部」を、昨 2018 年秋には京都府けいはんな学研都市で「スマートシティ EXPO in 京都」に併設して、ネクストモビリティ EXPO 2018」を開きました。多様な小さい乗り物の展示・試乗、未来を描く子どもたちとのワークショップ、「自動運転、ビットコイン、スマートグリッド」、「観光・おもてなし」、「グリーン・スローモビリティ」をテーマにしたラウンドテーブルと、模索を続けてきました。

姫島でのワークショップは、これらの取り組みをベースに、人口減に直面する離島・姫島の状況を受け止め、島で暮らし、働く人々の現実近づき、未来を切り開く知恵と情熱を産み出そうと企画されました。

真冬・2月の初め、交通の便も良くないため、定員 40 名と見積りましたが、関係者も入れて 79 名が申し込まれ、嬉しい悲鳴をあげました。大分県内(45)、福岡(6)、佐賀(3)、沖縄(5)など九州勢をはじめ、兵庫(1)、大阪(1)、京都(3)、滋賀(1)、静岡(2)、長野(1)、神奈川(1)、東京(10)、と、全国各地から大変熱心な参加がありました。

内容と成果については、この後の頁を開いてご理解頂ければと思いますが、足かけ 24 時間集中を途切らすことなく、最後まで真剣に姫島を元気にするプランを練り、アイデアを飛び交わし、議論を重ねた皆さんに、主催者の一人としてあらためて敬意を表したいと思います。きっとこの中から、事業として実行可能な、島を少しでも元気にできる具体的な計画が育っていくものと期待しています。

最後ではありますが、ご参加いただいた皆様をはじめ、講師・ファシリテーターの皆様、共催いただいた藤本昭夫村長をはじめとする姫島村の大勢の皆様、ご協賛・ご後援いただいた企業・団体の皆様、裏方役を務めた大分県、姫島エコツーリズム推進協議会、そしてわがハイパー研の所員に、心より感謝申し上げます。

多摩大学情報社会学研究所 主任研究員  
ハイパーネットワーク社会研究所 共同研究員  
会津 泉

## 目 次

1. 開催概要	-----	1
2. プログラム	-----	1
3. ゲストスピーカー／ファシリテーター プロフィール	---	3
4. 全体レポート	-----	5
5. チームプレゼン発表資料	-----	21
6. いまなぜ＜小さい交通＞なのか	-----	25
7. ワークショップを振り返って	-----	30
8. モビリティ展示試乗会レポート	-----	39
9. 参加者アンケート	-----	41
10. 運営を終えて	-----	46

## 1. 開催概要

- (1)テーマ 「地域社会を元気にするネクストモビリティ」
- (2)日 時 平成31年2月1日(金) 13:00 ~ 2月2日(土) 13:30
- (3)会 場 姫島村 離島開発総合センター やはず (大分県東国東郡姫島村 1569-1)
- (4)参加者 79名 (スタッフ、講師を含む)
- (5)対 象 モビリティ関連企業及び団体、自治体職員、公共交通関係者、  
行政・教育・福祉等関係者、姫島村及び近郊住民 等
- (6)主 催 ハイパーネットワークワークショップ実行委員会  
(大分県、西日本電信電話株式会社、日本電気株式会社、富士通株式会社、  
公益財団法人ハイパーネットワーク社会研究所)
- (7)共 催 姫島村
- (8)協 賛 モバイルクリエイティブ株式会社、株式会社オーイーシー、  
大分県自動車関連企業会
- (9)後 援 公益財団法人大分県産業創造機構、大分県情報サービス産業協会(OISA)、  
大分合同新聞社、NHK 大分放送局、OBS 大分放送、TOS テレビ大分、  
OAB 大分朝日放送、大分ケーブルテレコム、大分県自動車関連企業会

## 2. プログラム

### Day 1

2月1日(金)

セッション1 13:00-14:00		オリエンテーション	
13:00	開会挨拶	青木 栄二	実行委員長(ハイパーネットワーク社会研究所 所長)
13:05	歓迎挨拶	藤本 昭夫	姫島村長
13:10	ワークショップ 趣旨説明	渋谷 健 会津 泉	フィールド・フロー(株) 代表取締役 多摩大学情報社会学研究所 主任研究員 ハイパーネットワーク社会研究所 共同研究員
13:15	グループ・テーマの説明 A 地域の活性化とモビリティ B サービス・イノベーション C 乗り物の進化	濱田 千夏 寺下 満 松井 良友 井上 佳三 嶋田 悠介	NPO 法人 I-DO (アイディオ) 理事 姫島ITソリューション協議会 会長/T・プラン(株) 代表取締役 (株)ブレンネット ITソリューション部 部長 (株)自動車新聞社 代表取締役 雑誌『リガール』編集長 関西電力(株) 経営企画室イノベーション推進グループ
13:45	ショートプレゼン 「なぜいまく小さい交通>なのか」	大野 秀敏	(株)アプルデザインワークショップ 代表取締役

セッション2 14:00-16:00 <姫島を知ろう 聞く・歩く・見る・走る…>			
14:00	姫島紹介		動画上映
14:20	姫島立地 IT 企業による ショートプレゼン	松井 良友 芦田 秀之	(株)ブレンネット ITソリューション部 部長 (株)Ruby 開発 代表取締役
14:40	フィールドワーク		回って知ろう、姫島を
セッション3 16:00-17:30 <10年後の姫島は？日本は？世界は？>			
16:00	フィールドワーク 結果共有		
16:20	グループワーク	テーマを選択し、グループごとに社会課題を検討/設定	
		A 地域の活性化とモビリティ	(濱田 千夏/寺下 満)
		B サービス・イノベーション	(井上 佳三/桂 清太郎)
		C 乗り物の進化	(嶋田 悠介/倉本 義介)
セッション4 17:30-18:20 <課題を共有しよう>			
17:30	全体セッション	各グループからセッション3の結果報告・共有、討論	
18:20	終了		
夕食会 18:30-19:40			
18:30	夕食	姫乃家	
セッション5 19:45-22:00 <ビジョンづくり>			
19:45	ショートプレゼン 「私とファブスクーター」	倉本 義介	多摩ファビリティ研究所 代表
20:00	出展者プレゼン	(株)アルミス / モバイルクリエイト(株)	
20:30	グループワーク	課題解決に向けたビジョンを設定	
22:00	終了		

## Day 2

2月2日(土)

セッション6 8:30-10:30 <地域を元気にするために、モビリティは何ができるか>			
8:30	グループワーク	アクションプラン/提言の作成	
セッション7 10:30-12:00 フィナーレ：プレゼンタイム			
10:30	発表	各チーム10分プレゼンテーション (+質疑5分)	
セッション8 12:30-13:30 まとめ・振り返り・今後			
12:30	全員討論	ワークショップ全体のレビュー	
13:30	終了		

### 3. ゲストスピーカー プロフィール



#### 大野 秀敏

株式会社アプルデザインワークショップ 代表取締役

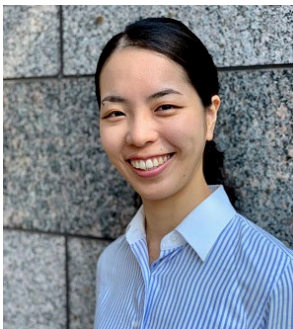
立命館大学客員教授、法政大学客員教授、東京大学名誉教授、博士(工学)  
(東京大学)日本建築家協会会員(JIA)、日本建築学会正会員一級建築士。  
著書『〈小さい交通〉が都市を変える マルチ・モビリティ・シティをめざして』  
『コミュニティによる地区経営 コンパクトシティを超えて』  
『ファイバーシティ 縮小時代の時代の都市像』。



#### 井上 佳三

株式会社自動車新聞社 代表取締役 雑誌『リガーレ』編集長

2007年、自動車新聞社入社。立命館大学 OIC 総合研究機構客員研究員。モビリティサービスの専門誌「LIGARE」(リガーレ)を立ち上げ、移動の質の向上が QOL の向上につながることをモットーに数多くのモビリティを取材。18年からは LIGARE.News を立ち上げ、「ひと・まち・モビリティ」に関わるニュースを配信している。15年には立命館大学で Future Mobility 研究会に参画し、豊かなモビリティ社会実現を目指す。



#### 濱田 千夏

NPO法人 I-DO 理事

“まちの移動をデザインする”ことをミッションに掲げ福岡県にて活動。自転車駐輪場事業を収益とした自主事業と市民サービスとしてのシェアバイク「シティバイク」サービスを北九州にて展開。その他、カーシェアリング、交通安全教育に取り組む。ネクストモビリティ・コミュニティ発起人のひとり。



#### 寺下 満

姫島エコツーリズム推進協議会会長 T・プラン株式会社 代表取締役

2006年T・プラン株式会社を創業。自動車関連、電機関連のエンジニアリング事業を営む。再生可能エネルギーを活用した商品開発に取り組み、電気自動車用の太陽光発電充電ステーション「青空コンセント」を自社開発。2014年姫島エコツーリズム推進協議会を設立し、離島振興のためエネルギーの地産地消をコンセプトに「青空コンセント」と電気自動車を組み合わせたエコツーリズムに取り組む。



#### 嶋田 悠介

関西電力株式会社 経営企画室イノベーション推進グループ

2009年関西電力入社。  
企画部門にて経営管理、中期経営計画策定に従事。2016年にイノベーション専門組織を立ち上げ、イノベーションのエコシステム構築を担当する傍ら、モビリティサービス事業の開発を手がけ現在に至る。  
趣味はキャンプ、ギター、スキー、ダイビング。



## 倉本 義介

### 多摩ファビリティ研究所 代表

1946年生まれ。名城大学交通機械学科卒業。航空整備士を経験後、1982年マニユアル制作会社（株）シー・ディー・エスを設立。2000年出張中の交通事故で歩行困難になる。2014年ファブラボを知り、2015年自分一人で車に積み降りしできるハンドル形電動車いす「Fab Scooter」を設計・制作。別府湾会議 2015「つくろう新たなソーシャル・モビリティ」に参加。2016年ネクストモビリティ・コミュニティ設立に参加、ネクストモビリティ・バザール 2016 in かるいざわ、ネクストモビリティ・バザール 2017 in くらべ、ネクストモビリティ Expo 2018 in Kyoto の企画運営等に参加。



## 板良敷 朝計

### 特定非営利活動法人フロム沖縄推進機構

情報通信関連企業誘致・活性化事業として、国内外での出展イベントへ参加し、県内IT関連企業の販路開拓支援及び県内進出を検討している企業への物件、立地場所のアドバイス、アテンドサポート等を行っている。また、アジアIT人材交流促進事業として、県内IT関連企業が要望するアジア諸国とのオフショア協業先の紹介、現地視察、ブリッジSE及び経営者層の招聘を行っている。

## ファシリテーター プロフィール



## 渋谷 健

### フィールド・フロー株式会社 代表取締役

外資系コンサルティングファーム、国内ベンチャー、国内大手企業経営戦略室を経て2014年にフィールド・フロー株式会社設立。

「事業に脚本を」をコンセプトに、関東と九州の2拠点を軸に全国各地で活動を展開し、主に産学官民金連携やオープン・イノベーションをテーマとした行政政策や企業戦略の立案・実行にプロの事業プロデューサー/ファシリテーターとして関わる。



## 会津 泉

### 多摩大学情報社会学研究所 主任研究員

### ハイパーネットワーク社会研究所 共同研究員

利用者中心の視点で、パソコン通信、インターネットの普及を推進。1993年、ハイパーネットワーク社会研究所の設立に参画。その後アジア・途上国のネットの普及、インターネットガバナンスなどグローバルな政策議論に参加。東日本大震災後、「情報支援プロボノ・プラットフォーム (iSPP)」設立に加わり、ICTによる被災地支援・調査に従事。2012年より「ソーシャル・ファブ」を推進し、最近「ネクストモビリティ」の展開に注力している。



## 4. 全体レポート ハイパーネットワーク・ワークショップ 2019

### 「地域社会を元気にするネクストモビリティ」

Himeshima: The Leading Global Village with Next Mobility  
めざそう！ グローバル・ビレッジ グローバル・ネクストモビリティ

#### Day 1 2月1日(金)

九州、東京、関西、沖縄、東北・・・全国各地から参加者が、飛行機、フェリーを使って姫島村に到着。フェリーターミナルにてランドカーと超小型モビリティでのお出迎え。会場の大分県姫島村の離島開発総合センターやはずに続々集合。



フェリーから見た姫島



ランドカーを利用して会場に向かう

#### 4-1. セッション1 オリエンテーション 13:00-14:00

会場は互いの意見を聞きやすいサークル型の机配置で、参加者は昼食を頂きながら、ハイパーネットワークワークショップ実行委員会青木委員長、姫島村藤本村長の挨拶を皮切りにワークショップが開始された。

##### ＜主催者挨拶＞

青木 栄二 ハイパーネットワークワークショップ実行委員会 委員長



こんにちは。今回、実行委員会の委員長を仰せつかっています、青木です。

聞いているだけではないのがワークショップですので、皆さん交流を深めて楽しんでいただければと思います。

40名の定員のところを倍の申し込みを頂きました。有難うございます。

ワークショップは25年前、1993年からやっています。2年に一回で、別府湾会議と交互にやっています。今回は「地域社会を元気にするネクストモビリティ」ですが、こういうふうテーマを掘り下げて

やっています。開催場所も福岡や沖縄などいろんなところで開催しております。

また、今回は藤本村長より準備段階からアドバイスを頂いており、ありがとうございます。どうぞよろしくお願いいたします。

## <歓迎挨拶>

藤本 昭夫 姫島村長



こんにちは。姫島村長の藤本でございます。

この度はワークショップ2019「地域社会を元気にするネクストモビリティ」の開催をうれしく思います。

姫島は大分県の唯一の村です。水産業と観光、そして、通信環境を利用したITアイランドを目指しています。ITアイランドに関しましては、平成16年に光ケーブルを敷設し、ケーブルテレビ姫島も開局し、情報化時代に対応してまいりました。人口減少に対応して、姫島を盛り上げていこうということで、県のご指導ご支援を頂いて、ITアイランド構想を立ち上げたわけです。既に、企業2社が入居しております。また、今年はコワーキングスペースを開設しました。今年中にはさらに個室を4個作る予定です。IT企業に来ていただいて、人口を増やしていきたいと思っております。

T・プランの寺下さんは姫島の出身でして、彼は電気自動車を用意し、EVのシェア事業等を推進しています。皆様より、姫島のこれから、5年後、10年後の提案を頂いて、活性化に活かしていきたいと思っております。

今回、開催の準備を頂いたハイパーネットワーク実行委員会と関係者の皆様にご心からお礼を申し上げますとともに、皆様のご健勝とご活躍を祈念しまして、私の歓迎の挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。



オリエンテーション

### <ワークショップ趣旨説明>

続いて、ファシリテーターよりワークショップの趣旨・狙いについて説明があった。

ファシリテーター (渋谷 健/会津 泉)



- モビリティの技術提案ではなく、社会のどんな課題を解決するか、姫島を通じて考える。
- 1日目は、課題とはなんだろう、その先につくるビジョンは何だろうかを考え、2日目はそのための必要なアクションをみんなでまとめていく。
- 3つのテーマで6つのグループに分かれて議論していく。それぞれ二人のファシリテーターをお願いしている。

### <グループ・テーマの説明>

検討テーマ3つの紹介を各グループのファシリテーターが紹介。

A：地域活性化 (寺下 満/濱田 千夏)



- 姫島で既に行われているグリーンスローモビリティの取り組みから、地域活性化のヒントになれば良い。エネルギーの地産地消と、地域経済、地域にお金を落とす方法を同時に考えている。
- NPO法人I-DOの取り組みから、地域に必要な交通事業を継続的に行う工夫のヒントになれば良い。行政から委託を受けず、どうやって持続的にビジネスを行っているかを考えている。
- 地方の課題にいかにもビリティが役立つかを議論したい

B：サービス・イノベーション (桂 清太郎/井上 佳三)



- MaaS(Mobility as a Service)という考え方のもと、サービスを切り口に議論する。
- Door To Door のサービス (スマホなどで決済を含めて全てを完結させる)
- フィンランドが始まり、定額を払うと、全てのモビリティ利用できる。

## C：乗り物の進化（嶋田 祐介／倉本 義介）



- 関西電力で時速5kmで走る自動走行の乗り物を開発している。
- 新しい移動体験によって地域がどう変わるか、エンタメ性も含めて議論したい
- 乗り物を自分で作ることで、社会的な課題を、自分で解決する。

（ビデオ紹介）

スズキのイノベーション、新型セニアカーの開発の取り組み。既成の発想の外に出る試みをシリコンバレーで実践。

### <ショートプレゼン>

株式会社アプルデザインワークショップ 代表取締役 大野 秀敏



大きい交通から小さい交通へ

- 日本は今まで、遠く、速く、大量に運び大きな交通によって成長し、拡大してきた。
- それによって、大都市が栄える一方で、昔ながらの交通網が弱体化している。
- お金と若者が衰退している中では小さい交通が社会に必要。

（本報告書に詳細資料を掲載）

## 4-2. セッション2

### 姫島を知ろう 聞く・歩く・見る・走る・・・ 14:00-16:00

姫島村の魅力、現状を把握する時間。姫島に拠点を構えるIT企業の話聞いて、姫島のポテンシャルを学ぶ。

次にフィールドワーク。姫島エコツーリズムが運営しているランドカー、日産ニューモビリティコンセプト等に乗って、実際に姫島を目で見て、島の人たちと話を聞いて聞いた。

#### <姫島紹介の動画> おおいた姫島ジオパーク

- 独特の地形を持つ島
  - 日本ジオパークに認定、火山活動
- 古事記からの歴史を持つ島
  - 古くから伝わる七不思議をもっている。
- 産業 車海老の養殖
  - 塩田から車海老の養殖へ

## <姫島進出企業によるショートプレゼン>

新しい産業の芽生え-地方ならではの魅力を活用

株式会社ブレンネット ITソリューション部長 松井 良友

- 人材を獲得するために地方に目を向けた。ワークライフバランス、家族と趣味、通勤時間が短いことが、地域にはない魅力。結果、非常に優秀な社員を得た。
- 小さい流れからビジネスチャンスがたくさん生まれ、小さい町でこそ、存在感を出しやすい。
- 地方創生の主役は姫島の住民の方なので、夢を実現するのが仕事。

株式会社Ruby開発 代表取締役 芦田 秀之

- 姫島と縁もゆかりもなかったが、大分県の活動を知り、姫島で起業することになった。
- 姫島村の村長も積極的で、自分がやらなければならない使命を感じた。地方の優秀なエンジニアに仕事を与えられる会社になりたかった。
- ドローン、地上走行型ロボットのソフトを開発している。東京の仕事をリモートで、受託開発している。Ruby言語で、いろいろなシステムの入れ替えなども行っている。
- 姫島に雇用機会を作るだけでなく、ブランディングも必要と感じ、ITアイランド構想を立ち上げた。

## <フィールドワーク>

グループに分かれて、EVに乗り、姫島の主な拠点を回って地元の方から説明を聞いた。

- 漁師さんの漁師小屋の見学、話を直接聞く。
- ジオパークの施設の見学



漁師小屋で漁師さんと話す



小型電気自動車で島内を回る

## 4-3. セッション3 グループワーク

10年後の姫島は？日本は？世界は？ 16:00-17:30

フィールドワーク+姫島紹介プレゼンでの感想を元に、課題を抽出する作業を行った。

### <感想の共有>

- 全員がフィールド見学を行った感想を、4分間でA4の紙に思いつく限り書き出した。
- 全員、感想を書いたA4の紙を床の上に置いた。会場内を見て回ることで、全員の感想の共有ができた。
- 数分会場を歩き回ったあと、近くにいる2~3人と会話をして感想を共有した。

### <課題の抽出>

- 3つのテーマの中から、興味があるテーマを選び、グループに別れた。(6グループ)  
これ以降はグループでの作業。

#### 1) 課題の抽出

以下の3つの観点から、課題を出した。

全員がそれぞれ1分半でポストイットに書きだした。

- 課題に対する率直な感想
- 姫島の可能性、期待すること。
- 困難なこと、問題となりそうなこと。

#### 2) 課題の整理

評価軸を書き込んだ模造紙(軸 難しい-簡単 古い-新しい)の上にポストイットを貼って課題の内容を整理した。

#### 3) 課題の共有

各グループのリーダーが、グループ内で整理された課題について発表、整理された課題を全員で共有した。

##### グループ1(濱田)

- 課題：人口減少
- 可能性：大学の誘致、企業の誘致

##### グループ2(寺下)

- 課題：地域で事業を継続することが難しい。
- 可能性：港を様々なモビリティの交通結節点にする。
- 可能性：特別なものを作って、新しい人に来てもらう。
- 課題：村民との衝突が避けられない？

##### グループ3(井上)

- 課題：当事者意識は誰が持つか、人口をどう流入するか。
- 可能性：自動運転、スマートシティで街を新しくする。
- 可能性：インバウンド観光、人の流入

##### グループ4(桂)

- 課題：人口減少、高齢化
- 可能性：リゾート化、カジノ、船の自動化

##### グループ5(倉本)

- 課題：人が少ない、高齢者が外に出ない、国立公園法に縛られている。
- 可能性：

##### グループ6(嶋田)

- 課題：姫島には知られていない魅力があるが、活かされてきているか。
- 可能性：食べ物のおすそわけ、住宅費がかからない。

#### 4) 課題の掘り下げ

本当に解決すべき問題は何かをグループごとに話し合った。

##### グループ1(濱田)

- 新しいサービスの伝えかたがよくない、地域の人にとっての視点が抜けている。
- いろいろな利害関係者がいて、話がまとまらないことが多い。
- (渋谷コメント)多様性という大きなキーワードがでた。姫島では、一人一人の楽しさ・幸せのための演出が少ない。

##### グループ2(寺下)

- そもそも村民は変化を望んでいるが、何をすれば良いかが分からない。
- 姫島の子供にとって魅力的な仕事があり、帰って来たくなくなるような場所にしたい。
- 魅力的な仕事=他の人に与える、社会の影響の大きさが実感できること。
- 当事者意識がそもそも低いので、当事者意識を持ちにくい。
- RUBYさんのような、島にいながら大きな影響を持つことができる仕事の数を増やして行くことが可能性。
- (渋谷コメント)変革が必要。イノベティブなことはすでにあるので、価値発信していくことが必要。イノベーションのチームが必要。

##### グループ3(井上)

- 昔の方が栄えていたが、文化がなくなっている。
- 車エビの養殖のイノベーションがうまくいかなかった。それは応援する仕組み、人がいなかったから。
- 閉じた世界なので、うまくいかない。
- (渋谷コメント)文化の崩壊がおきているというのは大きなキーワード

##### グループ4(桂)

- 住んでいないから分からない、村の人の気持ちになれないから分からない。
- 村の人は現状に満足しているから、問題ではない。
- 昔よりは生活が楽になっている。
- 将来のイメージ、課題は外からものを見る人が見えている世界なのかもしれない。
- (渋谷コメント)村の人は課題がなく、課題は外からしか見えないというのが思い込みではないか。

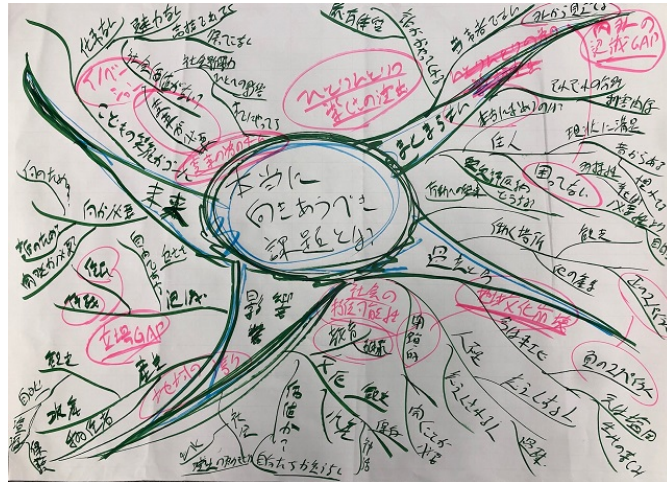
##### グループ5(倉本)

- 文化の崩壊が何の問題なのかが分からなかった。
- 新しいことによって移住者を増やすべきだが、文化を継承するなど村の誇りを持った人を育てたい。
- (渋谷コメント)教育と同じで、地域社会としての持続可能性が失われていることが課題。教育と同じ。

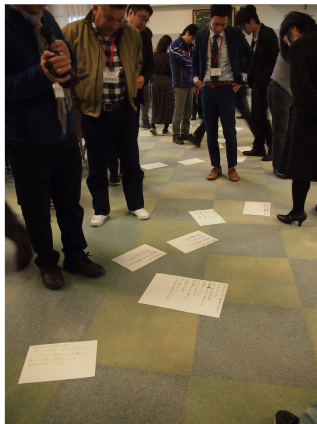
##### グループ6(嶋田)

- 春から秋にかけて、島はたくさん美しいものを持っているため、魅力を生かしたブランディングになる。
- アサギマダラ目当てで、人がたくさん来る。鳥の声がよく聞こえる
- 島の魅力を感じられる、良さを引き出せるモビリティが必要。
- (渋谷コメント)地域では、自分たちの良さを知らないのが、自分たち。内的評価が低いから、大事にしない。自分たちの地域に対するプライドがない。

<課題のまとめ>



- 内側の人と外側の人との認識ギャップがある。(行政の人、生活時と仕事時で言うことが変わる。)  
地域文化の崩壊
- 社会システムとしての持続可能性を失っている。
- 変革のためのチームがない(すでにイノベーションが起こっているが、生かされてない。)
- 多様性を認めていない。
- 地域への誇りが失われて来ている。



感想を共有する



チーム内で感想を共有



チームごとに感想を発表



チーム内で課題を話し合う





ポストイットに意見を書き出す



チーム内で課題について話し合う



#### <夕食会>

夕食は会場を姫乃家に移動して、姫島特産の車海老のしゃぶしゃぶをいただく。参加者全員で交流を深めた。

## 4-5. セッション5 ビジョンづくり 19:45-20:00

抽出した課題を受けて、ビジョンを描く作業を行った。

### <参考例ーショートプレゼン1> フィールド・フロー株式会社 代表取締役 渋谷 健

- フィールドフローの事業計画づくりについて。稼ぐまちづくりとは、民間事業の活性化を通じ、地域課題解決と価値創出を持続的に推進するモデルのこと。
- 大事なことは、オーナーコミュニティを作ること。自分で意思決定できるオーナー会議を作ること。
- 金融機関が出資できるようにつなぎを作ること。
- 手柄を立てると、周りに潰されることがある。ビジョンが共有されていないから。
- ラグビーワールドカップで、日本が南アフリカに勝った時、日本チームは、必ず勝てるという共通のビジョンをイメージしていた。つまり、何かを成し遂げるためには、ビジョンを持つことが大事。
- これからビジョンを共有するために、課題が打破されている状況を想像してほしい。

- (内側の人と外側の人との認識のギャップがない、地域文化が崩壊していない、社会システムとしての持続可能性を失っていない、変革のためのチームがある、多様性を認めている、地域への誇りが完璧にある) 状況を想像することをシェアしてほしい。

#### <参考例ーショートプレゼン2> 多摩ファビリティ研究所 代表 倉本 義介

- 自分でハンドル型電動車椅子を製作した。
- 自分で作ったことで、楽しさ、行動力、出会い、評価をえた。
- ネクストモビリティ、自分で作るという選択肢もある。

#### <参考例ーショートプレゼン3> 株式会社アルミス 濱田 航

- 佐賀県に本社がある、アルミ製品を製作する会社
- 会長の思いつきで、電動アシスト三輪自転車を製作。
  - ヤマト運輸、佐川運輸などで使われている。駐禁にはならない。
- 今後は、女性が使いやすいように改良する。女性の社会進出のきっかけとなるように。
- メンテナンスフリーの自転車を製作。
- チェーンを使わず、シャフトドライブを使う。
- ノーパンクタイヤのため、空気を入れる必要がない。
- アルミフレームで耐久性が良いが、軽い。
- 大学生が大学内で使用するシェアサイクルとして営業をかけている。
- 地産地消。自分たちでものを生み出し、解決する例

#### <参考例ーショートプレゼン4> モバイルクリエイイト株式会社 開発統括室長 桂 清太郎

- 15年前に創業したベンチャー企業。無線機器の開発、生産を行っていた。
- ITだけでなく、ロボットづくりも行っている。機械工作機を製作している。
- バス運行管理システム(バスロケーションシステム)の製作 (国内トップシェア)
- バスは決済のイノベーションが起きにくくなっている。タクシーについてはイノベーションが起きているのに・・・
- バスのシステム、決済などでMaaSに貢献できると良いと思っている。

#### <ビジョンの共有>

15分くらいで、これからビジョンを共有するために、さっきのワークショップで挙げた課題が打破されている状況を想像した。(内側の人と外側の人との認識のギャップがない、地域文化が崩壊していない、社会システムとしての持続可能性を失っていない、変革のためのチームがある、多様性を認めている、地域への誇りが完璧にある)

##### グループ1(濱田)

- 雇用が十分にある社会
- 人と人とのつながりがある社会
- 人が集う場所がある社会

##### グループ2(寺下)

- 姫島が、イスラエルなどの世界と繋がる。

##### グループ3(桂)

- 5G、ICT、自動運転などスマートな技術が導入されている。

##### グループ4(井上)

- 移動するための目的を設計する。
- 海外の観光客、子育て世代を対象にする。

##### グループ5(倉本)

- 多様なニーズに対して、選択肢が選べる社会

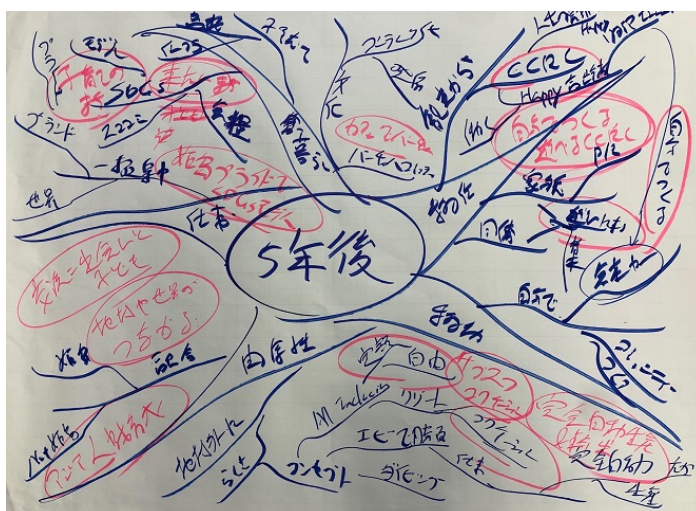
##### グループ6(嶋田)

- 内側の人と外側の人が良いを共有して、楽しく生活できる。

- 観光と居住の間の価値

### <皆が思い描くビジョンの世界(5年後)で、何が起きるか>

共有したビジョンの状況で、5年後どんなことが起こり得るかを15分でグループで考えた。



#### グループ1(濱田)

- 移住してきた奥さんが、友達とカフェでお話ができるバーチャルコミュニティの未来

#### グループ2(寺下)

- 姫島にイノベーション一極集中する、姫島プライドが生まれる。
- 姫島村民はプライドを持っている、それを外部に発信する。

#### グループ3(桂)

- 住む場所や仕事をする場所を選ばない、場所にとらわれない生活ができるようになる。
- 姫島は選択肢の一部
- バケーションをしながら、仕事ができる場所
- 姫島らしさ、コンセプトを持つことが必要。車えび？

#### グループ4(井上)

- エビの完全自動養殖
- エビが勝手に出荷されていく。
- エビ東南アジアに輸出する。
- 婚活アプリを作る、出会い系のまち
- 祭りの内容をコンテンツ化して、文化を継承するアプリを作る。

#### グループ5(倉本)

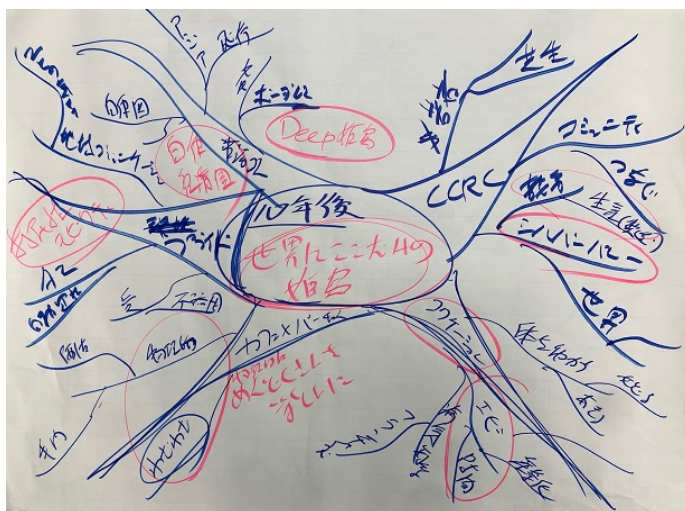
- 高齢化を促進して、高齢者の最後の活躍の場所（シルバーバレー）にする。
- 倉本カーを製作する生産工場を作る。
- リタイアメントの家族が遊びに来る。孫のために高齢者が金を使う。
- 自分で来るエンジニアのコミュニティ

#### グループ6(嶋田)

- 姫島にすることが社会のことになる。

## <皆が思い描くビジョンの世界(10年後)で、何が起きるか>

共有したビジョンの状況で、10年後どんなことが起こり得るかを10分でグループで考えた。



### グループ1(濱田)

- 物理的な手間をすることが価値になる島、わざわざすることへの価値が高まる。

### グループ2(寺下)

- 自動運転とAIによって、人の気持ちをくむモビリティが生まれている。

### グループ3(桂)

- リゾート地で仕事できるようになり、都会に戻るが、また恋しくなり、リゾート地に戻る。
- エビをアピールするために、フランチャイズ化して、東南アジアなどに輸出する。

### グループ4(井上)

- エビの完全自動養殖で東南アジアに輸出。
- 飛行場を作って、姫島県になる。自立経済圏を作る。

### グループ5(倉本)

- CCRCみたいなコミュニティ (シルバーバレー) をつくる。

### グループ6(嶋田)

- 漁師がコミュニケーションが得意。
- あえてディープな姫島を掘り起こす。

## <コメント> 姫島小学校 校長 佐藤 健

- 発想が柔軟だった。
- 自分では5年後の姫島はいつも考えている。姫島の子供は、釣りの仕方など、色々な知恵が身に付いている。村での生き方がわかっていることを活かしたい。
- ITとアナログの合体したような教育ができると良いと考えている。



ビジョンについてチームで話し合う



ビジョンをチームごと発表

## Day 2 2月2日(土)

### 4-6. セッション6

#### 地域を元気にするためにモビリティは何ができるか 8:30-10:30

##### <アクションプラン1>

- A4の用紙に、それぞれ10年後の姫島のビジョンを実現するために何ができるか3分間で思いつく限り書き出した。
- 5年後までに達成すべきことを書き出した。
- 1年後までに達成すべきことを書き出した。
- 書いた紙を床にばらまいて、全員で共有。
- 3~4人のグループを作り、感想を話して共有。

##### <アクションプラン2>

- ポストイットに自分が姫島の未来のために「やりたいこと」、「できること」、「やってほしいこと」を書き出した。
- 床に貼って、全員で共有。
- 3~4人のグループを作り、感想を話して共有。

##### <提言の作成 フェーズ1>

###### グループ1(濱田)

- 教育が大事、大学の学部を誘致して、一定期間姫島で過ごす。

###### グループ2(寺下)

- 島の良さを発信していくことが必要。
- 今あるリソースのリブランディング

###### グループ3(桂)

- 姫島の検索ワードの上位に、ポジティブなイメージが来るように自分たちでできることをする。

###### グループ4(井上)

- 移動しながら、地域コンテンツを掘り起こして行きたい。

###### グループ5(倉本)

- 海にでる乗り物があって良い、レジャーとして水陸両用の乗り物だと良い。

###### グループ6(嶋田)

- アサギマダラ周辺の道路の状況、姫島インスタ



全員でビジョンを共有



全員でやりたいこと、できること、やってほしいことを共有

## 4-7. セッション7 フィナーレ、プレゼンタイム 11:00-12:30

<提言の作成 フェーズ2>

### グループ1(濱田) チーム EBICATION

- 大学を誘致する(サテライト、リカレントで) →小学校の教育に繋げる
- 長崎県の平和学習によって、シビックプライドが醸成されていることを参考にした。
- 子供たちが島を案内する、毎週姫島教育を行うことで、プライドを醸成する(心の教育+最先端の技術の教育が必要)
- 大学でサテライト居住していた人、子供たちが戻る選択肢になるように

### グループ2(寺下) チーム 姫島の笑顔

- モビリティコネクティッドアイランド
- ITアイランドパーク プリンセスミスコン、APU誘致
- 屋台モビリティ
- 自動運転、キャッシュレスの無人屋台をつくる

### グループ3(桂) チーム エビを極める

- エビを極める世界中のエビを集める、エビの養殖をフランチャイズ化する、不労所得を増大する。「姫島」と検索すると、エビが出てくる
- エビの釣り堀、エビのゆるキャラ、エビを使った料理を極める、エビフライを使ったEV、株主ならぬエビ主を作る。→久米島とかに、サブスクリプションを伝えれば良いのでは？

### グループ4(井上) HimeshiMaaS

- 七不思議の神秘コンテンツ作り
- 観光、パッと見面白そうな所と、深掘りすると面白いところ二つある。
- Mystery as a service、Mystery アサギマダラ、アカシ象、シュリンプ
- XRでアサギマダラ、アカシ象、狐踊りを体験。
- 姫島のIT企業がコンテンツを作る。ソニーなどの先行事例
- ナイトツアーをすることで、必ず宿泊できるように。
- 空港から島を出るまで、流し続ける。
- 宿泊を増やして、交流人口を増やす。
- 姫島コインを導入し、経済権が外に出ない仕組みを作る。
- MaaSでコアなファンを作る→空港からフェリーを直行させると良いのでは？

### グループ5(倉本) チーム モビリティワン

- 乗り物を開発・製作する高齢者のシルバーバレーを作る。
- 住民一人一人の属性、年代に合った移動手段の実現
- 姫島は60歳でも若い。姫島に高齢者が来ると、まだ活躍できる場所になる。

### グループ6(嶋田) チーム JD

- 観光を長期滞在化できないか。
- 観る、住むをもっと魅力的に。
- 島には季節ごとの魅力があるが、活かしてきていない。
- 他の観光場所とは一線を画するPRが必要。
- 島の方々とのコミュニケーションができるポイントを作る。
- 観光と居住の良いとこどりの体験をできる乗り物とは。
- オープン性、スロー、暮らせる、観察できる。
- 移動しながら暮らす、星を見ながら移動する。
- 飲食店や宿泊施設がバンとしてあると良い。
- 乗り物のデザイン、風景になるデザインがあると良い。
- デザインチームが必要。
- 素人でもプロモーションビデオが製作できる。

参加者で優秀チームの投票を行い、HimeshiMaaSとモビリティワンが同率1位となったため、決戦投票を実施した。最終的にチーム：モビリティワンが最優秀チームとなった。



チームメンバーを変えて話し合う



チーム：モビリティワン



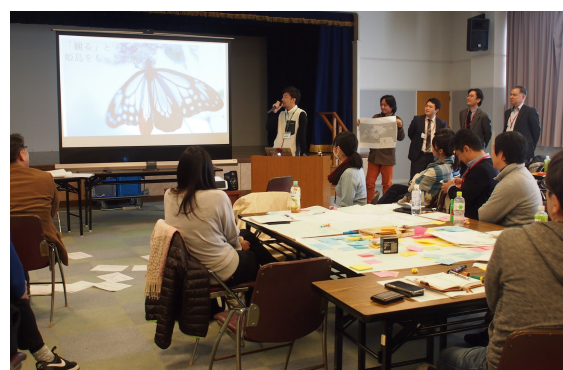
チーム：姫島の笑顔



チーム：エビを極める



チーム：HimeshiMaaS



チーム：JD



チーム：EBICATION

## 4-8. セッション8 まとめ、振り返り、今後 12:30-13:30

最後に、参加者全員で、参加した感想と、今後何に活かしていくかを、各自でポストイットに書き出し、振り返りを行った。

- プレゼンの仕方
- 離島で自分の開発した乗り物の使い方
- 思考の仕方
- ポジティブな思考プロセス
- 井上さんのプレゼンスキル
- フィールドワークの大切さ
- 政治とモビリティを融合させる仕組み
- 高校の生徒とワークショップしたい
- 県の施策にネクストモビリティの活用をフィードバック
- コネクションが作れた
- ネーミングセンス
- 屋台モビリティのアイデア
- 物々交換のアイデア
- 社員い屋台モビリティの設計を命じる
- ワークショップの手法
- 姫島の良い所
- イベント自体
- 意見をフラットに聞いて、まとめる
- 夢に向けた強い思いを共有して、実行すること
- 実証実験
- 姫島のプライドを落とし込んで、実行力を発揮
- 屋台モビリティの設計
- ファシリテーションの方法
- 地域事業の具体的なアイデアを利用する
- 最新の情報
- 家族を連れてくる
- アイデアの出し方
- 多様な人の立場を考えて、認識する
- ファシリテーターの渋谷さんを持ち帰りたい
- 多様な人との幅広い議論の仕方
- 姫島の可能性
- もう一回くる
- 内と外が連携する
- 何かを極める
- エビが美味しい
- 姫島が良い所、
- 沖縄に姫島のモビリティを持ち帰りたい
- エビの事業
- 姫島が楽しい所
- 笑顔

## 4-9. 同時開催：モビリティ展示試乗会、 ロボットカープログラミング体験 10:00-14:00



ワークショップと併行して、実際にモビリティに試乗できる展示会と、小中学生向けにロボットカープログラミング体験が開催された。（詳細レポートは別章に記載）

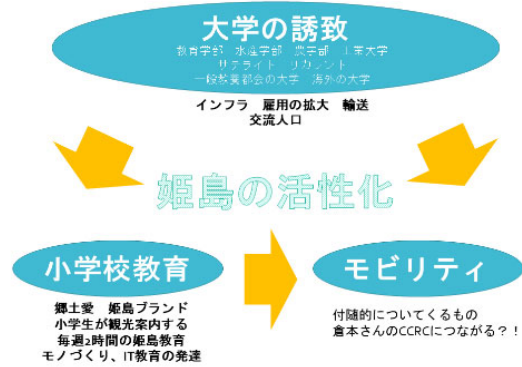
特に姫島村の子供達が多く参加し、実際にモビリティに乗ったりロボットカーを動かすなど、親子で楽しむ姿が見られ賑わいを見せた。

（記録：斎藤せつな 編集：加藤大和）

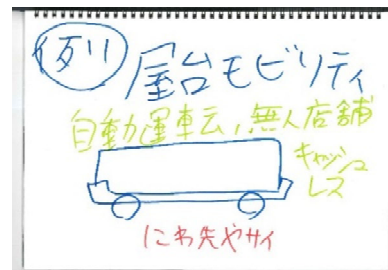
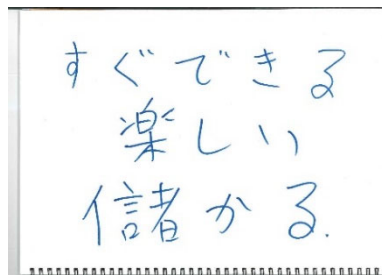
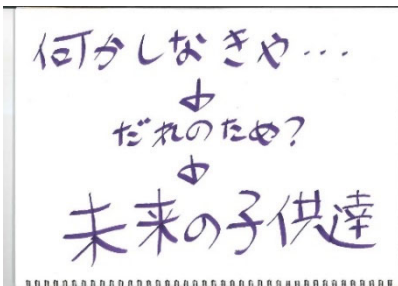
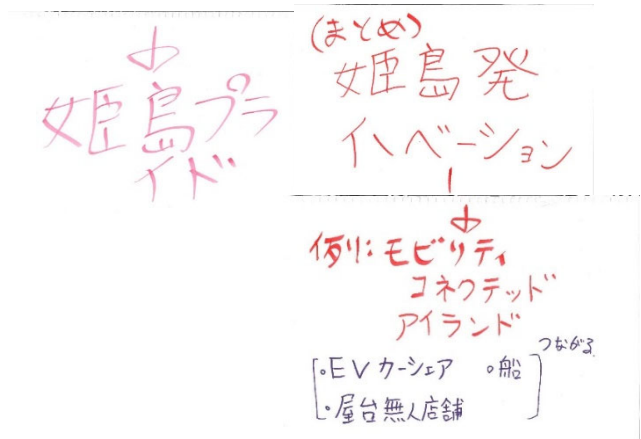
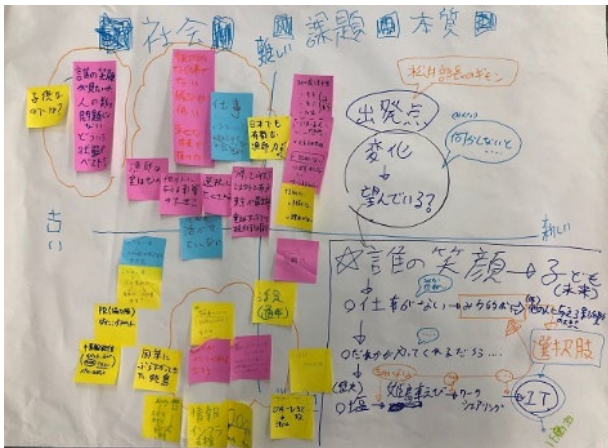


# 5. チームプレゼン発表資料

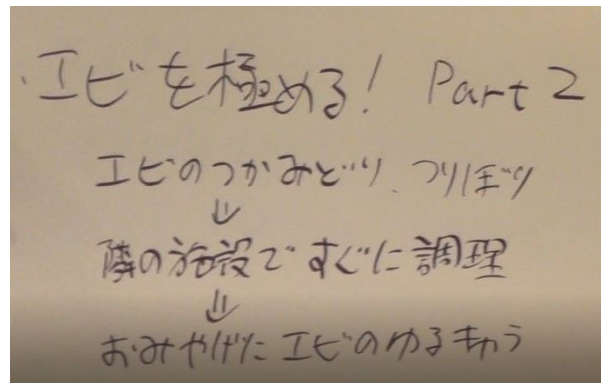
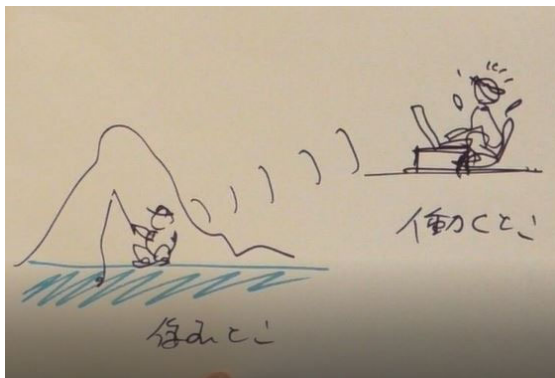
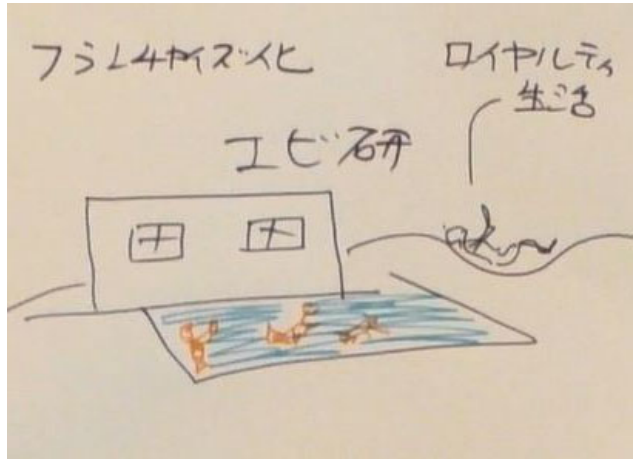
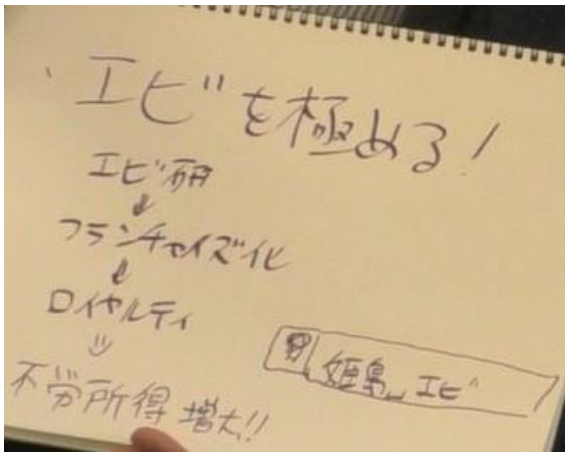
## グループ1：チーム EBICATION



## グループ2：チーム 姫島の笑顔



グループ3：チーム エビを極める

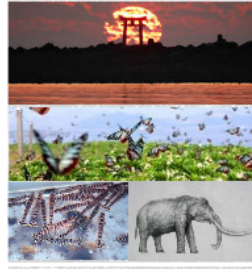


グループ4：チーム HimeshiMasS





姫島の七不思議マップ



MaaS(Mystery as a service)

- ・M：ミステリー (Mystery)
- ・a：アサギマダラ
- ・a：アカシ象
- ・S：えび (Shrimp)



姫島MaaSの概要

ツアー対象者  
家族連れ、35~45歳の家庭で魅力をPR  
宿泊を狙う

化石を発掘体験、蝶の撮影、きつね踊り、アカシ象、アサギマダラの群舞、海老の養殖体験（つかみ取り）などをリアルとバーチャルで行う。

空港〜フェリー〜島内のモビリティを提供  
例：VRでフェリーの中で、  
姫島の海と車海老コンテンツ  
（車海老の乱舞！！）  
勝海舟が隣に乗っている

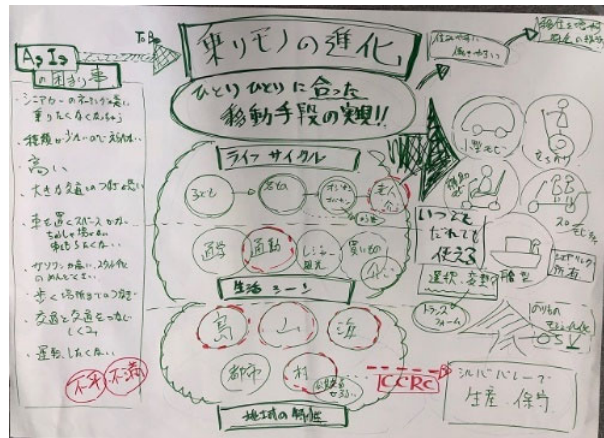
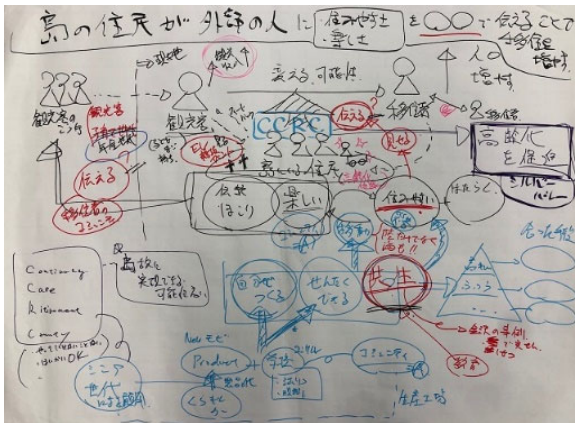


将来像

- ・ 宿泊を増やし、交流人口を増やす
- ・ 姫島コイン（地域通貨）を導入し、空港で販売、経済圏が外に出ない仕組みづくり
- ・ モビリティツアーで魅力に気づいた人を対象に深堀体験を提供し、ファン化させる  
昔の文化「健全な夜這い」を街コンのコンテンツとして提供  
きつね踊りを体験など
- ・ toB向けのモビリティサービス（海老の完全自動養殖）

将来的にはエネルギー自給化を経済の自立化を目指す

グループ5：チーム モビリティワン



# グループ6：チーム JD



姫島には知られてない季節ごとの魅力がある



が、活かしかれているか？



「数週間滞在？居住してみようか」と思える場所に

他の観光場所とは一線を画するPRを。



島の方々とのコミュニケーションできるポイント



観光と居住の良いとこどりの 体験を最大化する移動とは？



- オープン性
- スロー
- 暮らせる
- 観察できる

暮らすように移動する。



宿を時期ごとに転々とする。



「動く、動く歩道化」とか。



星を見ながら移動する。

## 6. なぜいま＜小さい交通＞なのか

建築家・都市構想家 大野秀敏

交通、つまり人や物が移動すること、あるいはさせること。これを都市の課題として考えてみようと思います。なかでも小さい交通の重要性を中心に考えたいと思います。

すこしだけ私について。私は建築の設計を業としていますが、都市の将来のことも考えてもいます。ただし都市計画の実務はやっていないので「都市構想家」と称しています。

なお、スライド中、転載許可が取られていない図版はマスキングして不完全にしています。それ以外の図版は公有のもの（商用以外は転載自由）と筆者に著作権が属する（利用時には許可が必要です）ものです



都市の形態は、いろいろな要因によって決まります。生産力はもちろん、周辺の都市や他国との関係、建築文化や宗教、そして政治形態など様々な要素が複合して都市の形態は決まりますが技術の問題は無視できません。特に流れの技術は都市形態の決定において重要です。流れの技術の中には水の技術、交通の技術、通称の技術など様々な流れを制御する技術が関わります。

人が生きるためには水は必須です。水が確保できなければ人の集住地は成立しません。ですから水の技術（堰、汲み上げ、鑿井、浄水、汚水処理、圧送、貯水）は、都市建設技術の核心にあります。

水を川や泉から直接得るだけの段階では都市の立地も規模も限られます。技術の発達で都市立地の可能性を広げます。



人が、遠隔地と交流し、支配し、都市が富を蓄えるためには、物と人を効率的で安全に運ぶ技術が必要になります。過去を振り返れば徒歩の時代に始まり、動物の力の利用、車の発明、風エネルギーの利用、蒸気や電気などの新たなエネルギーの発明が時代を推進してきました。近代社会では、プロペラ推力からジェットエンジンそしてロケットへとスピードと正確性を増してきました。

中国の鄭和の大航海や欧州の地理上の発見はグローバリゼーションの始まりでした。欧州諸国の強い覇権の追求はやがてポルトガル、スペイン、オランダ、イギリスと数々の植民地帝国が興隆を繰り返し、やがて19世紀の欧州の時代に至ります。

一方陸上では、欧州では馬車の利用が盛んで18世紀には公共交通に馬車が用いられるようになり、欧州の都市では馬車などの大型の乗り物が通れる様に道路が拡張されます。



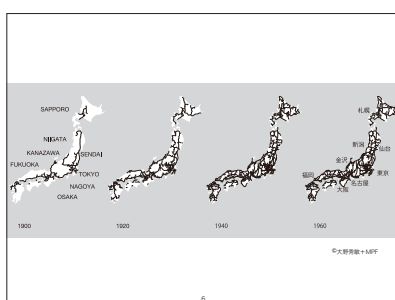
日本の交通の歴史をみると、他の国とは異なる発展をします。

中世までは貴人の移動に牛車が使われていたのに、江戸時代になると駕籠になります。極端に乗り心地がわるく刺客に対しても全く無防備ですが、島国での支配のために江戸幕府は交通手段を制限することを選びました。その結果が桜田門外の変ということになり、自らの命運を短くしました。都市空間で見ますと、街路は人の徒歩スケールで間に合いました。



1968年に成立した明治新政府が最初に取り組んだことの一つに駕籠に縛られていた交通体系を一挙に変えました。鉄道の敷設でした。蒸気機関車をイギリスから購入して、東京と横浜の間を走らせました。

すぐに自動車の時代が控えていましたが、都市空間は歩行者スケールのままで、馬車の時代を経て自動車の時代を迎えた欧州との違いが顕著です。



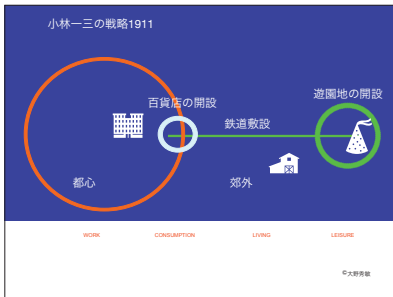
その後、鉄道網は広がり、20世紀に入ると日本を縦断し、それからさらに20年後には、国土を面的に覆います。鉄道は日本という国民国家成立の物質的な基礎になりました。



この図は首都圏における都市域の拡大を示しています。江戸期は基本的には歩行移動でしたので、江戸の範囲は歩いて帰られるということでした（それでも18世紀にはロンドン、パリとともに100万都市になりました）。

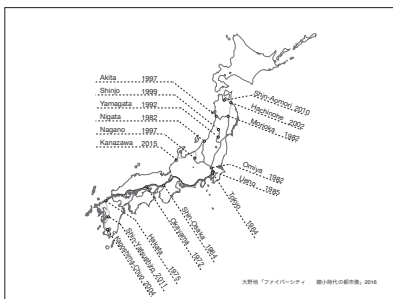
前のスライドで示した様に、近代になると急速な鉄道網の発達があり、都市部では鉄道によって「郊外」ができました。郊外発生の理由は、都市の人口増加と工業の発達によって公害が都心の居住性を悪くしたことで、そして（特に英米において好まれた）郊外生活が憧れの対象になったことなどがあります。そのため、都市域は鉄道線沿線に集中しヒトデの様に郊外に向かって都市域が広がりました。

1970年代からは日本も自家用車時代が本格化し、鉄道駅に関わらず住宅地が成立する様になり、都市域は拡大します。



日本の都市の郊外化は1920年代に鉄道が牽引して始まりました。この変化を捉えて事業としてもっとも成功したのが大阪の阪急電鉄でした。創業者小林一三は、単に線路を敷いて電車を走らせるだけではなく、自分の路線の都心側の駅にデパートを作り、郊外側の駅に遊園地と有名な少女歌劇劇場を作り、沿線を住宅地として開発しました。これによって、沿線の郊外住宅を買った家族の主人は通勤のために電車を使い、妻は百貨店に買い物にゆき、休日には郊外の遊園地に子供づれで行きます。小林は、郊外生活をパッケージにして商品にしたわけです。交通技術の進展がビジネスモデルと結びついたとき、初めて生活様式の変化を生み出します。このモデルは首都圏にも持ち込まれました。

この様に百貨店は鉄道時代を象徴する小売形式ですから、自動車時代には非力でショッピング



新幹線計画は当初弾丸列車と呼ばれていました。Bullet Trainという表現が英語にもありますが、それを現実化したのは新幹線でした。先の東京オリンピックに対応するために1964年（昭和39年）10月1日に東京駅 - 新大阪駅間で東海道新幹線の営業が始まり、世界の高速鉄道時代の幕が開かれました。その後も新幹線網は広がり、2015年度の年間利用者数は3億6000万人に上ります。

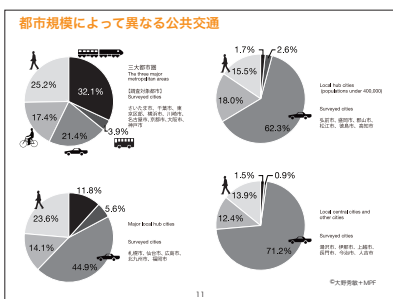
移動が高速化されると世界が小さくなると言われますが、世界が小さくなったぶん、そのなかで生き残れる都市は限られます。実際、東京大阪間が日帰り出張ができるようになったために関西圏の経済的地盤沈下が加速しましたし、それまでの特急停車の都市で新幹線が停まらないために、いわば「中抜きされた都市」は衰退しました。交通技術は都市の地政学を変えます。

**〈大きい流れ〉**  
もっと速く、もっと早く、もっとたくさん

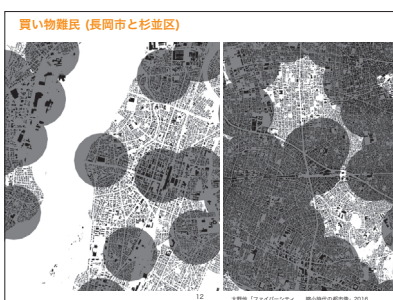
**〈小さい流れ〉**  
近くに、ゆっくり、少し

交通における変化の本質は、大きい交通と小さい交通という概念で単純化するとよく理解できます。〈大きい交通〉は「もっと速く、もっと早く、もっとたくさん」を目指す交通です。それに対しては、近くに、ゆっくり、少しという交通です。歴史を振り返れば、〈大きい交通〉を目指して技術開発も投資も行われ、〈大きい交通〉が世界地図を塗り替えてきました。そして一方で〈小さい交通〉が押しのけられてきました。

図に、交通ではなく「流れ」と書きましたのは、交通で起きている変化が、情報分野でも金融分野、エネルギー分野、小売分野など多くの分野で起こっているからです。これらの分野に共通することは「流れ」ということです。こう言えば、GAFと呼ばれる企業を代表に、現在グローバル企業と呼ばれる大企業が扱っているのは流れだということに気づかれるでしょう。

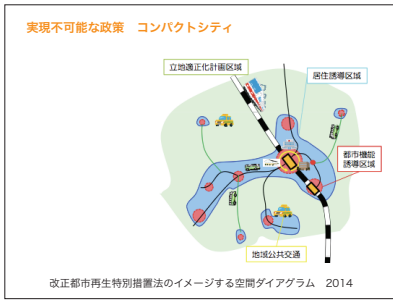


現在の日本の都市の交通状況を比較すると、大都市と中小都市で大きな格差が発生しています。大都市では主に鉄道を使った公共交通が便利に使えますが、中小都市では完全に自動車依存状態になり公共交通を使うのは中学校と高校の生徒、そして自家用車を利用できない老人だけで、その役割は微々たるものです。自家用車が利用できれば問題ありませんが、そうでないと大変なことになります。



自動車社会自動車過依存社会で自家用車を使えないと生活が成り立たないことを示す用語が「買い物難民」です。この地図は、新潟県長岡市と杉並区における食品を売る店もしくは食堂からの500mの円を描いたものです。

白い円の外に住む人が食事にありつこうとすると500m以上移動する必要があります。自動車社会自動車過依存社会では、商業施設の商圏は自動車の時間距離で決まります。



自動車社会自動車過依存社会の多くは人口減少と高齢化に直面しています。それを解決するために、コンパクトシティという都市計画概念が急速に広まって新聞やテレビで都市計画の専門家でも口にするようになってきました。2014年には政府は、これを政策化し「改正都市再生特別措置法」が施行されました。この図はその概念を示すものです。拡散した居住地を鉄道沿線の緑色の地区に集めようという政策です。

しかし、これは「言うは易し行は難し」、「猫に鈴をつける」の類の政策です。というのは、確かに歩行で暮らしていた時代の様に都市がコンパクトになれば問題は解決するかもしれませんが、すでに郊外に拡散してしまった住宅地に住む若い人たちをどうやって中心部に移転させるのでしょうか。その費用はどうやって捻出するのでしょうか？実現にはすくなくとも100年は要するでしょう。



コンパクトシティのメリットとして、よく言われるのは「歩いて暮らせる街」です。この標語は自動車が都市を占拠し始めた70年代頃から、世界中で言われ始め都市計画の重要な目標となりました。それに従って、日本でも各地に歩行者天国ができ、住宅団地の中心部は自動車を排除した計画が多数生まれました。右の写真は、東京の多摩地区の住宅公団の団地で「歩いて暮らせる街」の好例です。ところが住民が高齢化した現在、広大な中心部が頭痛の種になってきています。それは足腰が弱った高齢者にとっては毎日の買い物も苦痛なのです。歩行者専用空間ですからタクシーも使えません。そこでNPOが自転車タクシーを運行して、そうした居住者を支援することになりました。

〈大きい交通〉が世界を支配した現在、〈小さい交通〉に肩入れをする時期だと、私たちは考えています。毛細血管が弱ると生体も弱ります。日本の地方都市ではまさに毛細血管がボロボロ

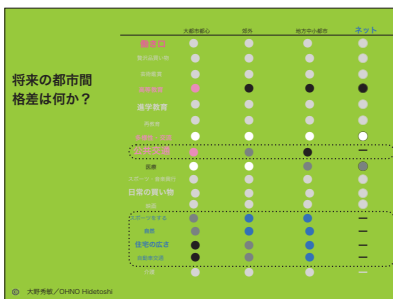


流れの技術の変化の進化発展によって、都市間格差が大きく開いてきました。それを非常に単純化して整理してみました。

白が勝ち、黒が負けという星取表です。個々にはいろいろな事例がありますので、大雑把な傾向をするための整理だとご理解ください。



ここにICTが加わるとどうなるのか？私自身はこの方面は素人ですので、最近になって漸くその力を認識することになりました。例えばアマゾン、小さな街に住んでいても大都市に住んでいても平等に世界で一番大きい本屋を利用することを可能にしました。小売ではこういう平等化がどんどん進み、昨今は、高級品を手にとって買う時以外はどこにいても買い物は自由どころか、宅配を利用すれば重いものを持ち帰ることすらなくて済むようになりました。この変化の速度は加速してゆくでしょうから、やがて他の分野も、住むところによる差が解消され、大都市と地方小都市住まいの差は縮まることは確実でしょう。



ICT技術が成熟する10年後20年後に残る都市間格差はなんですか？

それには二つある様な気がします。

一つは身体の移動です。どんなにICT技術が成熟しても最後まで直接体験の価値は代替できないでしょうから、そこに移動することができるかどうか鍵になります。この点では大都市が優位にあります。

二つ目が自然との接触です。この点では小都市が優位です。



だれもが好きな時にどこにでも行ける移動の自由を確保できるかどうかは非常に重要な要素になりますが、小都市は完全に自家用車過依存社会になり、子供や免許を持っていない人、自動車を保有できない人には極めて暮らしにくい社会になっています。

自動車はその手段として優れていますが、それだけでは不十分です。移動において小都市が大都市と伍すためには、公共交通の整備と小さい交通の充実が必要ですが、自K網の少ない小都市での公共交通の整備には自ずから限界があります。



小さい交通には、自転車だけではなく、車椅子や、ゴルフカート、スケートボードなどいろいろあります。小ぶりで、排出ガスを出さず、気軽に利用できる様な乗り物です。大きい交通に持ち込めるものもあります。気軽に使え、身体的な能力の違いを補い、自然を感じ、少しばかりの筋肉を使って健康増進に役立ち、時には小さい仕事も作り出すような乗り物です。  
→ 大野秀敏、佐藤和貴子、齊藤せつな 『「小さい交通」が都市を変える:マルチ・モビリティ・シティをめざして』 (2015、NTT出版)



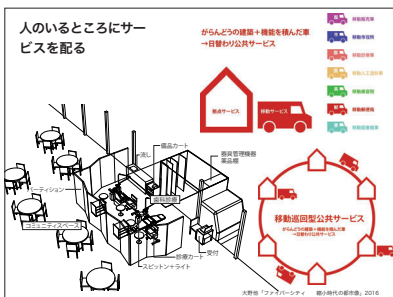
この本の最後に強調したことは、このような小さい交通を生かしたまちづくりです。



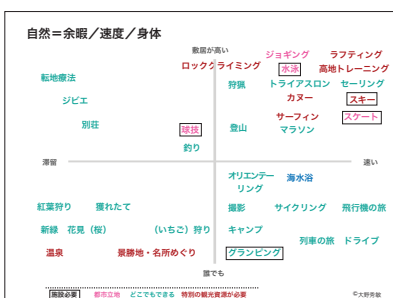
この本をきっかけに、全国から有志があつまって小交通をベースに次世代の移動の問題を考える集まりができました (ネクスト・モビリティ・コミュニティ)。  
私たちは、小さい交通の意義を広く知ってもらうために、2016の軽井沢を皮切りにして、黒部、京都と三回のイベントを開催してきました。



私たちの著書で強調した、マルチモビリティシティは、同じ時期に実際にヘルシンキで誕生していました。MaaS (マース Mobility as a Service) と呼ばれている取り組みです。様々な移動手段を、一つのアプリで予約から決済、ルート案内などをこなせる統合的な試みで、いま欧州では様々な取り組みが各都市、各地域で始められています。



もう一つ忘れてはいけないことがあります。コンパクトシティの発想は「サービスが提供される場所に人を移動させる」というものですが、「人のいるところにサービスを届ける」という方向の検討も同時に必要です。  
すでに一部は実施されていますが、もっと組織的に展開すれば、地方都市でももっと住みやすくなります。例えば行政、歯医者、乾物類、郵便、図書などを車に積んで、今ではどこでもある空き家を改修して、自動車で運ばれてきた商品や機器を展開すれば、役所、歯科医院、乾物屋、郵便局、図書館に早変わりします。7つの地域で7つのサービスを展開すれば、行政コストは1/7で済みます。  
→ 大野秀敏 『ファイバシティ 縮小時代の時代の都市像』 (2016、東大出版会)



ICT技術が成熟したあとに残る都市間格差の二つ目は自然との接触です。  
よく考えてみると、自然との接触そのものを目的として楽しめる人は限られています。多くの人には何かの媒介やきっかけが必要です。  
そのひとつにスポーツです。スキーをして雪山を堪能し、ダイビングをして海を楽しみます。人生が長くなり、人生全体での余暇時間の総量がふえる今後の日本では、自然のなかで体を動かす喜びは必ず多くの人の心を捉えることは間違いがありません。





スポーツには多かれ少なかれ移動が伴い、そのために用具を使い、その多くは乗り物であるとも言えます。高齢者時代の交通というと車椅子が頭に浮かびます。それはそれで大事ですが、高齢者の8割は介護が不要です。ただし少し弱くなっています。その多数派の人たちにも若い時代と同じ様に自然の中で体を動かす喜びを提供できれば地方都市はまた多くの魅力を発揮できるのではないのでしょうか。



速度は快樂の源泉です。衰退する都市が新しい快樂を提供できれば何の心配も要らないでしょう。楽しい乗り物を皆で考えてはどうでしょうか？ ウォークマンもスマホも「ななつ星」もジョギングも実用性より楽しさが人気の決め手になったのではないのでしょうか？

《小さい交通》で地域の活性化

- だれでも、いつでも、行きたいところに行ける交通環境を作る
- ICT技術の活用しつくす
- 快樂は速度から

27

## 7. ワークショップを振り返って

株式会社自動車新聞社 代表取締役 井上 佳三

私が担当した、姫島をモビリティサービスで活性化するテーマでは、地元の文化などのソフトコンテンツが重要で、それを保存できにくくなっている状況では、なかなか観光や外からの収入を増やして行くことは難しくなっています。そんな中、島外から企業が参入し姫島のなかで雇用を生み、事業を行い始めていることは、希望になります。

そこから、島の外と中をつなぐことで、島にとって何が必要なのかの優先順位が見えてくるのではと感じました。

モビリティの本質は、移動したいと思う動機やモチベーションの方が大切で、それがこれからの地方版MaaSにとって一番重要なことです。姫島の中で、こういった移動のニーズがあり、そこに住む人々が何をしたいのかを深堀できると、もっと内容が深まったのではと思います。

---

姫島エコツーリズム推進協議会 会長

T・プラン株式会社 代表取締役 寺下 満

このたびは、ハイパーネットワーク ワークショップ2019に参加させて頂きまして誠に有難うございました。現在、少子高齢化・人口減社会を迎え、地域の産業、社会の振興を図るためには、新たな発想やイノベーションが必要で、こうした課題を展望し、企業・団体、ユーザー、行政、研究者など多様なステークホルダーが参加して、地域社会における新たなサービスやイノベーションのデザインを考えるワークショップを大分県姫島村で開催して頂いたことに感謝しております。その道筋を示唆する役割のファシリテーターが務まるか不安な部分もありましたが、充実したワークショップが開催できたのも、これもひとえに、ハイパーネットワークワークショップ2019の実行委員や事務局の皆様のお力添えのおかげと、深く感謝しております。また、共にグループワーク1：A 地域の活性化を担当して頂いた皆様のおかげで、一人ひとりの暮らしを支える次世代交通サービスとして期待されるネクストモビリティを中心に、地域の実態に合ったデザインやサービスについて発表、提案することができましたこと、大変嬉しく思います。

さて、弊社、T・プラン株式会社のある大分県中津市は福沢諭吉先生を輩出した場所であり、先生の語録で「一身独立し一國独立す」という有名なものがあります。独立自尊の真髄は、自立のために学ぶことにより他人に依存することのない独立心を養い、そのことによって社会の発展に寄与する生き方ができると言っています。

弊社は、その哲学に則り、自動車燃料の海外依存や大気汚染、地球温暖化等の問題に対して、自動車のエネルギー源も自国で調達できる社会の仕組み、エネルギーの地産地消を実現したいという思いから、2009年に「電気自動車普及の研究」をテーマに産学官連携交流グループ立上げ、未来のモビリティネットワーク社会についてあるべき姿を議論してきました。そこで自動

車社会からモビリティネットワーク社会へのパラダイムシフトは、豊かな自然を有する地域で、特に少子高齢化による交通量が減り続ける離島や中山間地域からニーズが起き、その形は自動車が電化し、地域の再生可能エネルギーで得た電気で充電できる社会の実現が、自立したあるべき姿だと姫島における実証実験から確証を得ました。

今回の参加者アンケートによると、ワークショップで掲げた地域の活性化で、姫島の今後の可能性について、「色々な可能性を秘めていると感じ、島民の方のために本当に役立つ事が実現でき、姫島が地域課題を解決するトップランナーになって頂きたい」という感想や、「ポテンシャル高く、もう実行始めており、想いをもった人がいるので、目指したい姿にきっとなります。」などの意見があり、島外からの視点により、私たちも学びや気づきの機会になりました。さらに、ネクストモビリティの可能性・課題・期待についても、「公共公通の課題解決に質することが期待できる」や「これからの高齢社会に必要」など、小さな交通に大きな可能性を感じてもらうことが出来たと思います。

結びに、ハイパーネットワーク ワークショップ2019で出会えた皆様に、貴重なご縁を頂いたことに大変、感謝申し上げます。

---

## NPO 法人 I-DO 理事 濱田 千夏

濃密な2日間のワークショップだった。しかし、不足感を覚えたのも確かであった。わたしの所属したグループが地域活性化の視点から考えた今後の姫島村の展開は「移住を見据えた交流人口を増やそう」であった。しかし、最終日のプレゼンテーションを終えた際、大事な箇所を見落として議論が進んでしまったような気がしてならなかった。姫島を離れ日常業務の中で、たまたまSNS上で流れてきた記事にひっかかるものを覚えた。私たちのワークショップでターゲットにした対象とは異なるが、外国人旅行者の誘致に成功している自治体についてデータと現場からの声でわかったことを紹介した記事であった。詳細は割愛するが、要約すると、「外国人旅行者を伸ばしている地域に共通しているのは、訪れた外国人に『その地域ならではの魅力的な体験を提供して』おり、

“「今だけ」とは「その時期にしか体験できないもの」。

「ここだけ」とは「その地方でしか体験できないこと」。

「あなただけ」とは「押しつけではなく、外国人旅行者それぞれのニーズに合った体験やサービスを提供すること」。“

(NHK/WEB 特集:外国人観光客が欲しが「〇〇らしさ」2019年2月5日 17時43分) であるという。

この「〇〇らしさ」を見つけることこそ、地域にとってとても大変な作業であることは2日間の滞在期間中、私だけではなくワークショップに参加した皆さん全員が実感したことであると想像するが、この視点なしに地域のビジョンは為し得ないと感じた。

実は、今回ファシリテーターとして参加したワークショップの開催地、姫島村を訪れるのは2回目だった。はじめて訪れた際に、2つの印象的な出来事があった。1つは、寺下社長(T・プラン)の運営される姫島エコツーリズムの営業所の隣でぼんやり海を眺めていたときのことで

ある。寺下社長からひとこと「のんびりしたところでしょう。何にもせんでも時間がすぎる。」ポツリと言われた。私にとって、そののんびりとした時間は心地よく今でもたまに思い出すのである。何があるわけでもなく、見たい情報があるわけでもない。だが、いつも過ごす場所とはフェリーで 15 分切り離されただけでも、いつものあらゆる情報に取り囲まれた間隔から解き放たれる場所だ。寺下社長が取り組むサービスは、その「のんびり」にあうモビリティの貸渡し業である。最高時速は 20Km まで、具体的にこのスピードだとどういう景色が見えるのかというと、写真をとるタイミングを損なうがそこに住む人々の暮らしがみえる時間の流れなのである。ワークショップの最終日もフェリーまでの時間を持て余し、島内を半周してみた。どこまでも海の青い線が続く途中で、少し曲がり民家の通りを走行しているとギョっとしたのは、ワカメが洗濯物のように庭中に干されている個人の庭であった。今まで、そのような場面をみかけたことがなかったので、とても驚いた。きっと姫島の島民の方には日常なのだろう、しかし「ここだけ」にしかない姫島らしさを垣間見た景色であった。今回の 2 日間のワークショップの 1 日目の地元漁師を営んでいる方にお聞きした話も同様に、とても貴重なお話であった。

2 点目は、地域の方々が今そしてこれからの姫島をどう思っているのか？という点である。前回訪れた際、フェリー乗り場の近くのお土産売り場で 1 時間ほどゆっくり売店の方とお話する機会があった。実は外国人観光客は多いこと、島内において住民のひとは駐車場を持つという発想がないなど様々なお話をさせてもらった。その中で、当時行われていた姫島村での観光客の呼び込みについて尋ねると、私にはどこか他人事のように聞こえてしまった。誤解して欲しくないのだが、では、わたし自身が地元で色々行われているイベントについてどう思うか尋ねられてもどこか「他人事」になってしまうのだ。これは姫島村だけではなく、当事者であるがゆえの問題であると感じる。シビックプライドなど地方では声高に言われるが、他者からの視点で評価されてもこそばゆくてなかなか、「いいでしょう！」とは自らアピールするのはハードルが高いのではないだろうか。

今回のワークショップでも少し残念だと感じたのは、地域の方からのフィードバックを頂く機会が少なかったことである。6 グループに分かれて様々な視点から壮大なもの、ベビーステップを踏んでゆくものなどアイデアが多く出た。そのアイデアを、ぜひ、「こそばゆい」と感じているどこか「他人事」に聞こえてしまうであろう住民の方にぜひ、感想を聞いてみたかった。そこで、他人事から自分ごとになる事は難しいかもしれないが、「姫島らしさ」を新たな視点で見てもらうことは出来たかもしれない。

姫島村は「IT アイランド」として新たなステップを踏んでいくとお聞きしている。今までの「姫島らしさ」が IT というツールによってさらにブラッシュアップされ新しい「〇〇らしさ」に発展することを願っている。

## 多摩ファビリティ研究所 代表 倉本 義介

2019年2月1日12時10分伊美港発姫島行きフェリーで姫島へ渡る。13時から姫島ワークショップの始まりだ。

今回のワークショップは人口減少、高齢化が進む姫島をネクストモビリティでどうしたら活性化できるかを考えるというワークショップ。私は高齢者であり障害者でもあることでゲストスピーカーとしての参加だ。姫島村長の挨拶、姫島の紹介、ゲストの講演に続き14時から早速ワークショップが始まる。参加者はハイパーネットワーク社会研究所の関係者も含めて79名。

まずは姫島エコツーリズムさんが用意した超小型モビリティや4人乗り、7人乗りのカートに分乗して島内巡りのフィールドワーク。地元の漁師さんのトラフグをいけすで落ち着かせてから出荷するという話しなどは新鮮だった。

会場の離島センターに戻り渋谷さん、会津さんのファシリテーションでワークショップが始まる。私も6つのグループの一つをまとめるファシリテーター役を仰せつかった。テーマは「乗りものの進化」だがメインは姫島をいかにして元気にするかである。

やはり、どうしたら人口減少を食い止めるかということがメインのテーマになり、どうしたら若い人達を定住させられるか、あるいはいかに島外からの移住者を受け入れられるのかが議論になる。一見で島外から訪れて島民の方々とはほとんど交流していない我々にとっては暗中模索、推測でしか考えられない部分が多い。既に移住している方の話を聞いたりしながら議論をしようとするがなかなかまとまらない。幸い私のグループにはこのようなワークショップに慣れた若者がいてテキパキと皆の意見を模造紙にまとめてくれたので私はほとんどファシリテーターの働きはせずに済んだ感じだった。

結論的には高齢化を受け入れざるを得ないなら逆に活用しようということで、いかに高齢者が住みたくなり、移住しやすくするかという点に注目して個々にあった移手段を自分たちで作成し、維持管理していくことを高齢者が自ら行う「シルバーバレー構想」や「日本版 CCRC(Continuing Care Retirement Community) 構想」の導入、移住した高齢者の子供や孫たちが訪れて魅力を感じる島づくりに焦点を当てて島の活性化を図ろうということでまとまった。私たちのグループ名は「モビリティ ONE」、全員挙手による投票で決める最優秀賞をリガーレイの井上さん達の「姫島 MAAS」チームと決選投票の結果勝ち取ったが、どのチームも



優劣付けがたいアイデアがいっぱい、私たちのチームはプレゼンターを務めてくれた若者のプレゼンカが優劣を決めた感じだった。

1日目は13時～22時過ぎまで、2日目は8時半から13時半まで食事以外はほとんど休息なし延べ24時間という超ハードなワークショップ、私はゲストスピーカーとして1日目の夕食後のナイトセッションで「Making Fab Scooter」で自作のハンドル形電動車いす「Fab Scooter」製作記の講演をさせていただきました。Fab Scooterは完成からもうじき4年目になるが講演の度に多くの人に感動してもらえて新たな出会いも芽生える。今回は佐賀から参加して自社製品のノーメンテナンス自転車を展示していた(株)アルミスさん。帰りに社長とも会うことが出来て乗りものの開発について話も弾みFab Scooterにも試乗してもらった。



実は私は姫島訪問は二度目、一度目は2016年の7月。姫島エコツーリズムさんに初めてヤマハの4人乗り公道走行可能なゴルフカートの実証実験が開始されたとき。そのときから比べるとコムスや7人乗りのランドカーなど、種類も台数も倍増した感じ。

でも、島の雰囲気はほとんど変わっていない感じ。泊まったところも同じ所だったし、帰りにお土産を買ったお店のおばちゃんも変わっていなかった。島を元気にして島民を増やすというワークショップだったが、このままであって欲しいという感情も出てきてしまった。一日目が終わって民宿までの道から眺めた満天の星空。でも所々の街灯が邪魔をする。やはりこの島には過疎感と静けさが似合う気がする。それでいて経済的に自立することが出来るという方法は何なのだろうか。活性化と過疎感や静けさを両立させる方法は何なのだろうか。ワークショップの議論とは裏腹な感情に複雑な気持ちになる。

ただ、願わくばフェリーや民宿の障害者対応だけはもう少し進めて欲しいと思う。車いすでも乗り降りしやすくしたフェリーのタラップ。ベッドのある民宿。浴室やトイレの手すりなど。障害者だけでなく高齢者にも快適になると思う。これで観光客が増えるかどうかは別にして多様な人に優しい観光地になるということはどこの観光地であっても必要なことだと思う。



## 株式会社 Ruby 開発 姫島 I T アイランドセンター長 天辰 幸洋

「モビリティを活用して地域社内を元気にする」と聞いて最初はピンとこなかったのですが、ゲストスピーカーの方々のお話から得たもの、さまざまな立場のかたとお話できたこと、そして姫島や日本の地方に対する課題をモビリティの観点から考えたことで、なるほど「ネクストモビリティ」には未来を変える力があるのか、と感じられた非常に有意義なワークショップでした。また、少し趣旨とは外れますが姫島の将来についてこんなに多くの方々と話し合ったことがなく、新しい視点からの面白いアイデア・考え方をたくさんいただけた場でもありました。私達のチームでは最終的な結論として「エビを極める」になりましたが、島にあるものを尖るものにすることで活路を見出す考え方はモビリティにも応用できるはずで、既に EV はありますし、私達 IT 技術者もいる、そして島には素材がたくさんある。そこに改めて気付かされたワークショップでした。参加させていただきありがとうございました。

---

## 株式会社ブレンネット ITソリューション部 部長 松井 良友

現在、姫島が抱えている課題に対して「何かできないかな」という思いはありましたが、今回のワークショップで、課題や現状を整理することで、これからの道筋が見えてきました。今後は目的から逆算して行動計画を定めていくこと、さらに、行動の意味を理解して実行に移すことが大事だと思います。

異業種の方とのワークショップで貴重な体験をすることができました。ありがとうございました。

---

## モバイルクリエイイト株式会社 技術部 開発統括室長 桂 清太郎

モバイルクリエイイト（モバクリ）は大分市に本社を構える移動体通信事業を中心とした会社です。大分のバス会社3社（大分バス、大分交通、亀の井バス）のバスロケーションシステムを受託した事で MaaS プレイヤーとしての可能性がぐっと近くなったと感じていました。そんな時に姫島ワークショップ（ネクストモビリティ）の情報を頂いて参加しました。最初は参加者としてみなさんと意見交換できれば良いなぐらいで考えていましたが、気づけばファシリテーター役を引き受けてしまい、ドキドキハラハラのワークショップでした。サービス・イノベーションを中心に議論し熟考する事は、日々の中であまりない事にも気付きました。二日間知恵を絞ったおかげでグループとしては面白いビジネスモデル（姫島サブスクモデル）ができたと思っています。

今後は地方 MaaS を焦点としたビジネスモデルや面白いアイデアを議論する場が持てるとありがたく存じます。次回、別府湾会議にはモバクリ社員を積極的に参加させたいと思っています。

## 株式会社アルミス 九州支店 営業部 濱田 航

今回のワークショップに参加し、とても良い経験をさせていただきました。

参加団体は弊社からするとすべて異業種の方々が最初は不安と緊張からなかなか馴染めずにいきました。しかし、ワークショップが始まり 1 つの課題に対し様々な団体で話し合うことにより交流が広まりました。

夜に行われた企業 PR では 9 割以上の方がアルミスのことを知りませんでした。企業 PR を通じアルミスが何をやってどんな信念を掲げて仕事をしているかを伝えることができとても良い宣伝となりました。2 日目の試乗会では前日の企業 PR のおかげで皆様が電動三輪車とメンテナンスフリー自転車をじっくり見ていただき、とても充実感のあるものとなりました。

この度はこのような素晴らしい機会を与えていただき誠にありがとうございました。機会があれば次回もぜひ参加したいと考えております。

---

## 関西電力株式会社 経営企画室イノベーション推進グループ 嶋田 悠介

姫島。

「地域活性化」「離島」「高齢者の足」どれも聞き飽きる、いや耳をふさぎたくなるほどの課題。そういった重苦しくもある課題と面と向き合う気がおこらないまま興味半分で姫島を覗いたのが本音。

なんだかんだ行ってみると「なんでこんなに素晴らしい場所なのに！」という言葉が出てくることを望んだが現実はそんなに甘くはなさそうだった。

確かに美味しいもの（特にヒジキ！）、美しい風景、心優しい島の方々……。ただ、どこの苦しむ地方に伺ってもよく似た話はあるもんだ。「うちがうまく PR すればもっと良いまちになるのに」「磨けば光る」というような言葉が頻出する。

そして、本題「モビリティ」。さて。さてと。でもな、移動なんて所詮手段だからな。

そんな状態でワークショップに入る。地図を見る。季節を見る。

すると、どうだろう。これまでポツポツと入っていた島のコンテンツ同士が道でつながり、季節により異なる表情を見え、彩りさえ出てくる。

「移動」の「移」。「移ろう」。英語で言うと` `change` ` `。景色が変わり、表情が変わる、面白さも変わる。移動の真髄がどこにあるのかが何となく再認識されたかのようだった。何かと何か、誰かとどこかをつなぎ、時間を経て、季節を経てその変化を楽しむ。それこそがやっぱり移動の楽しみなのだ。

というところで気持ちよくなって終わってしまった。

まだまだ姫島で何ができるだろう、僕のプロジェクト 5km/h モビリティ iino では後回しにしてしまった課題に具体的に何ができるだろうか。今もまだモヤモヤは晴れない。



## フィールド・フロー株式会社 代表取締役 渋谷 健

### ○ワークショップ概要

今回のワークショップは「モビリティで社会の課題を解決する」ことをテーマとした。最大のポイントは、新たなモビリティを創り出すのではなく、モビリティという手段を使ってよりよい社会を築くために何が必要かを議論し、描くことにある。

このテーマに対して今回はさらに次の3点をサブテーマとして設定し、全員参加型の対話を中心としたワークショップを行った。

- ① 私たちが向き合うべき社会の課題とは？
- ② 私たちが目指すべきビジョンとは？
- ③ ビジョンの実現のために私たちがやるべきこととは？

また上記に対して大きく以下3つのカテゴリに対し、それぞれ2つのチーム・計6チームを形成して議論を進めた。

- ・ 地域の活性化とモビリティ
- ・ サービス・イノベーション
- ・ 乗り物の進化

ワークショップはフィールドワーク終了後から開始し、サブテーマごとに3つのセッション（1日目夕方・1日目夕食後・2日目午前）に分けて実施した。一連のプロセスはデザインシンキング、およびシステムシンキングの手法を用いて行っている。最終的に6つのチームよりビジョンを実現するためのアクションが提言されるに至った。

### ○セッション① 「私たちが向き合うべき社会の課題とは？」

セッション①はフィールドワークの結果を踏まえ、「私たちが向き合うべき社会の課題とは？」をテーマとした対話を行った。このときの留意点として以下を参加者に共有している。

- ・ モビリティは手段として位置づけ、社会課題として何を解決すべきかに焦点を当てる

（モビリティが一見関係ない社会課題も対象とする）

- ・ 姫島はサンプルとして位置づけ、姫島の社会課題に限定せずに議論する

上記の結果、参加者全体で以下の課題認識を共有し、「姫島で起きている社会課題は世界中で起きていることであり、姫島での課題解決は世界にとって価値がある」ことを確認した。

<抽出された課題>

- ・ 地域社会の状況に対する地域内外および立場による認識のギャップが大きい
- ・ 地域への誇りが失われ、地域文化が崩壊してきている
- ・ 社会システムとしての持続可能性を失ってきている
- ・ 変革のためのチームがなく、イノベーションの機会を活かせていない
- ・ 多様なひとたちの日々の楽しさ・幸せの演出ができてない

## ○セッション② 「私たちが目指すべきビジョンとは？」

抽出された課題に対して飛躍したビジョンを設定するために、以下の状況を仮定して1年後・5年後・10年後とステップアップで未来像を各チームにて描き、全体で共有した。なお、議論を具体化するために本セッションでは姫島をフィールドとしたビジョン設定としている。

＜ビジョン設定のための仮定＞

- ・ トップクラスの知恵が集まっている
- ・ 行政も住人もみんなの方向性が一致して協力できる
- ・ 地域文化が成長し、発展し続けている
- ・ 社会システムとして持続し、次世代の担い手を育て続けている
- ・ 変革のためのチームが生まれ、応援され、活躍している  
(イノベーションの機会を活かしきって社会を変えられる)
- ・ 多様なひとたちの日々の楽しさ・幸せを実現している
- ・ かかわった人たちすべてがこの地域を愛し、誇りを持っている

上記の結果、参加者全体で以下の要素を含んだ「世界にここだけの姫島」が共通のビジョンとして共有された。

- ・ CCRC から教育から企画生産までできるシルババレーの実現
- ・ コワーケーションで実現する、世界のエビ財閥  
(エビをはじめとする水産完全自動養殖産業の創生と海外展開)
- ・ 物理的なめんどくささが価値になるまち
- ・ 地域のプライドを乗せて走る村民性モビリティの提供
- ・ 完全な自立経済圏の提供
- ・ 「こないとわからない Deep なコミュニティ」としてのブランド形成

## ○セッション③ 「ビジョンの実現のために私たちがやるべきこととは？」

最終セッションではビジョンの具体的な実現可能性を高めるために、前日のビジョン共有を踏まえて以下要素を書き出して参加者間で共有した。

- ・ ビジョンのためにできること（提供できること）
- ・ ビジョンのためにやりたいこと（実現したいこと）
- ・ ビジョンのためにやってほしいこと（助けてほしいこと）

そのうえで、途中でチームをシャッフルして繰り返し議論を行い、最終発表をまとめた。

## ○総評

参加者の多様性が高かったことと、参加者が非常的に意欲的であったことに加え、ワークショップ前や途中の情報提供、フィールドワークが功を奏して非常に深い議論となった。とくにこれまでにない新たなアイデアが化学反動的に創発されたことは非常に高く評価すべきである。今回のワークショップのアプローチは、新たなモビリティのデザインのみならず、社会課題解決のための手法およびその事例として発信していくべき内容であった。

## 8. モビリティ展示試乗会レポート

ハイパーネットワークワークショップの同時開催として、2月2日 10:00~14:00 に姫島村離島センターにて、姫島で活動中の4輪小型EVや今後国内発売予定の海外製2輪EV、地元のIT企業の展示等による「モビリティ展示試乗会」を開催しました。ワークショップ2019の参加者はもとより、姫島村在住の方々も多く参加されました。実際に、いろいろなタイプのモビリティに試乗頂くことで、今後の地域で活用される利便性を実感して頂けたと思います。また、小中学生を対象に「ロボットカープログラミング体験」を実施し、親子連れで楽しむ姿も多くみられました。

以下、その内容を報告します。

### 【概要】

- ・開催期日 2月2日 10:00~14:00
- ・場所 大分県姫島村 離島センター
- ・展示内容 次世代モビリティ、協賛企業、姫島村IT企業による展示
- ・試乗内容 展示車両を姫島村公道にて試乗走行
- ・試乗者数 70名
- ・出展企業：T・プラン株式会社、モバイルクリエイイト株式会社、株式会社アルミス、株式会社Ruby開発、株式会社ブレンネット、大分県自動車関連企業会、公益財団法人ハイパーネットワーク社会研究所

### 【各社 展示内容】

#### ① T・プラン株式会社

姫島村エコツーリズムにて、観光者向けに提供している小型EVを展示。



#### ◆NISSAN 「New Mobility Concept」 (写真 左)

全長 2340mm 全幅 1230mm 全高 1450mm  
乗車定員 前後2名 最高速度 80km/h

#### ◆トヨタ「コムス」 (写真 右)

全長 2,395mm 全幅 1,095mm 全高 1,500mm  
乗車定員1名 最高速度 60km/h

非常に小型ですが、かなりのスピードが出ます。オープンウィンドウで海沿いを走るの爽快感です。



#### ◆ヤマハ「ランドカー」

全長 3,100mm 全幅 1,340mm 全高 1,840mm  
乗車定員：4人/7人 最高速度 20km/h

低速ですが、観光用として、安全に景色を見ながら走るのに最適で、運転も簡単です。ゴルフカートに保安装置等をつけて公道走行可能となっております。今回はワークショップで姫島港～離島センターの送迎に活躍しました。

② モバイルクリエイイト株式会社

日本未発売のエストニア製2輪電動バイクを展示。



◆Stigo.Ltd 「Stigo」

最高時速 25km/h 重量 14.1kg

連続最大走行距離 約 40km

このバイクは原付 2 種免許で公道走行可能です。簡単に折りたためるので、バスや列車に乗せて、遠地へ移動が出来ます。モーターもかなりパワフルで、加速もいいです。

③ 株式会社アルミス

カスタマイズ可能な荷台付き電動アシスト3輪自転車とメンテフリー自転車を展示。



◆ALUMIS 「KAITO」(写真 左)

最大 70 kg 積載可能な荷台を持ち、電動アシストにより、高齢者でも軽い踏み出しで走行できます。農作物や水産物の運搬に最適です。

◆ALUMIS 「Rich」(写真 右)

フレームはアルミ製、ホイールはマグネシウム製で、錆に強い作り。ノーパンク仕様タイヤにより、シェアリングサービス用として活用が期待できます。

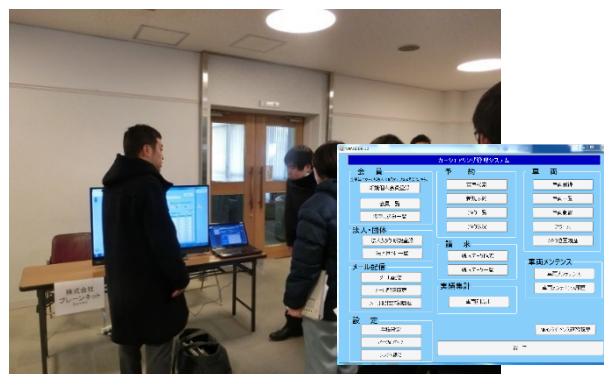
④ 株式会社Ruby開発

ドローン操縦ナビゲーターの展示



⑤ 株式会社ブレンネット

EVシェアリングソフトウェアの展示



⑤ 大分県自動車関連企業会

会員企業マップと活動内容パンフの展示



⑥ 公益財団法人ハイパーネットワーク社会研究所

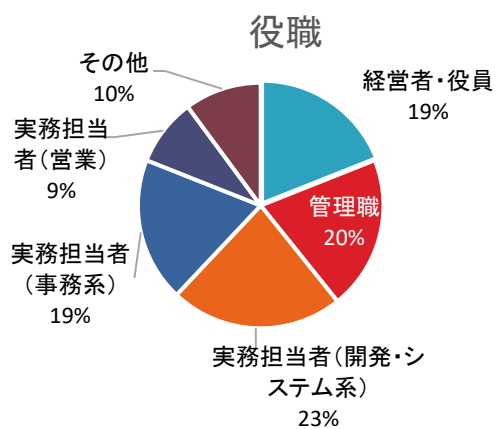
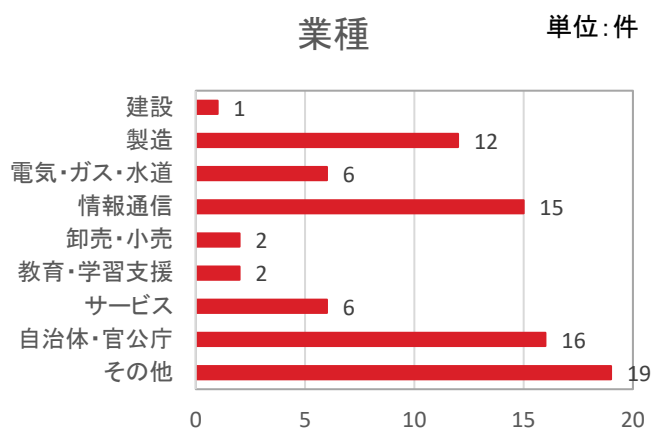
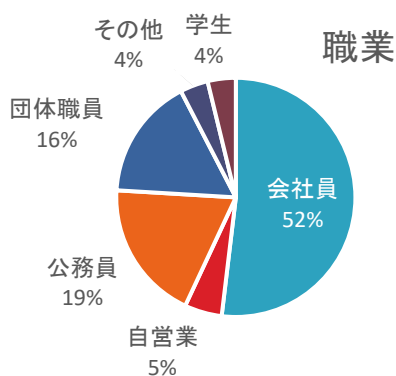
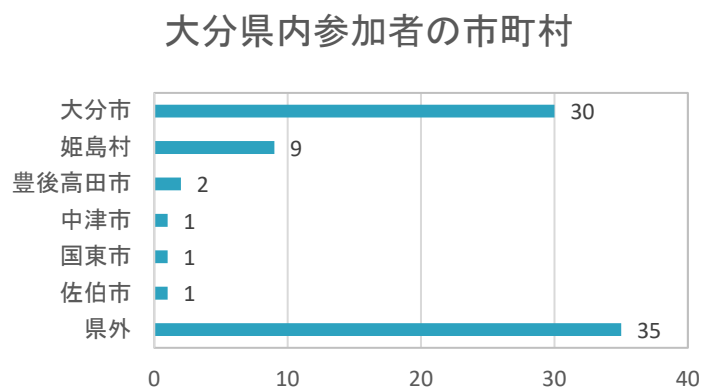
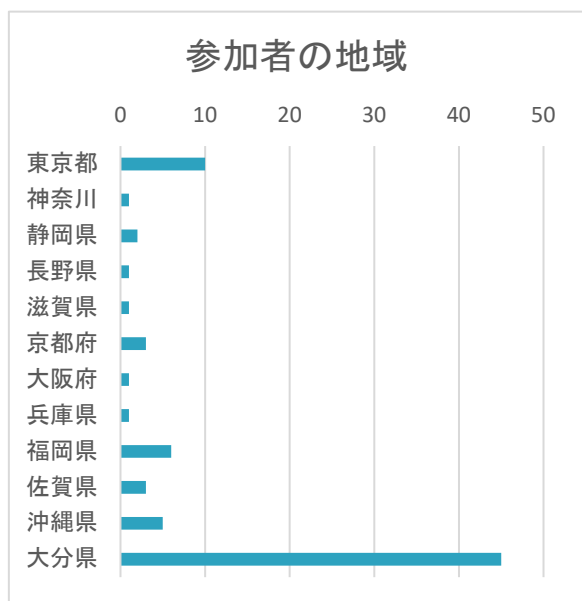
ロボットカープログラミング体験を実施。



## 9. 参加者アンケート

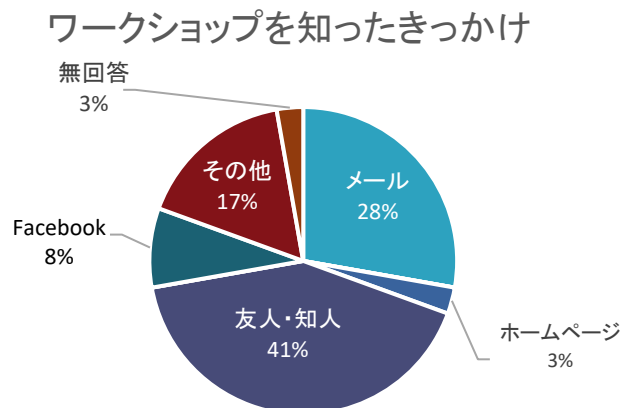
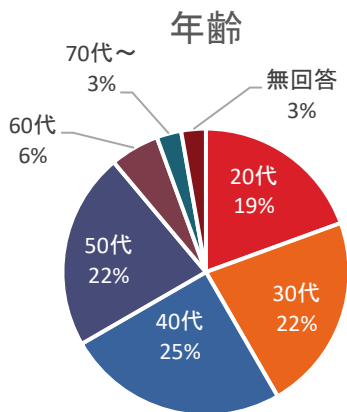
### ① 参加者の皆様に関する各種情報

参加申し込み頂いた全員の情報に基づく、集計結果です。

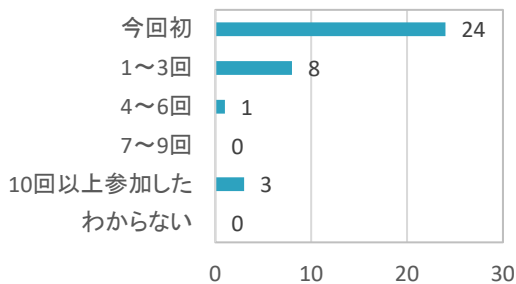


## ② 参加者のアンケート集計結果

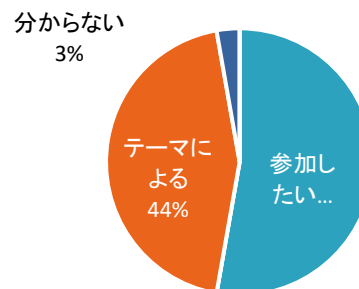
以下、当日会場にて参加者に記入頂いた 36 人分の集計結果です。



これまでにワークショップに参加したことがありますか？



次回も参加したいですか

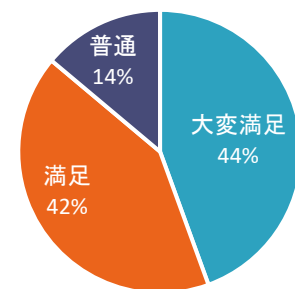


## ③ 各セッションについて

—ご意見・ご感想—

- ・ありがとうございました。
- ・各テーブル、ファシリテーターによって深層レベルが異なってしまう。
- ・結構むづかしいテーマ設定であったように思いましたが、ファシリテーターの上手な進行展開でよかったです。
- ・様々な意見交換ができてよかった
- ・参加者のさまざまな人の参加しているのが良かった。いろいろな意見が聞けた。
- ・時間に余裕がなかった。補正感がすごかった。
- ・全員が平等に発言し、思考できるプロセスができています
- ・楽しかったです。
- ・ファシリテータの方のほり下げ方は素晴らしい
- ・ファシリテート、運営に不満。準備不足ではないでしょうか。つめこみすぎ、消化不良
- ・普段もやもやしていたのが、皆さんの意見を聞いて少しくリアになりました。
- ・もう少し、進め方や事前情報があるとうれしい。
- ・もう少し、フィールドワークをしたかった
- ・もう少しフラットにみんなを尊重した感じになるとよいかと思います（上から目線というか知

各セッションについて



ってる/知ってないを関係なく)

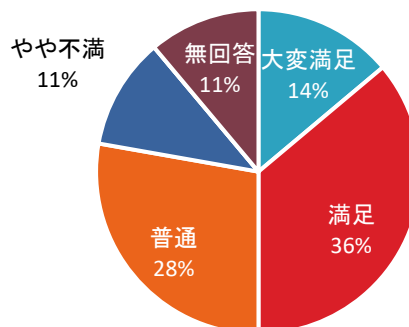
- ・モビリティのニーズの奥深さを感じた。
- ・問題解決のプロセスが参考になった。

#### ④ 展示試乗会について

—ご意見・ご感想—

- ・色々なものを見れるのはおもしろかった。
- ・多くの種類に乗りたい。
- ・音が静か
- ・小型モビリティに興味あったので、見れて良かった。
- ・試乗会は体験できて良かったです。
- ・試乗ができたことは大変満足。色々なものを実際に運転したかった。
- ・特に新しさは感じない。見る時間がない
- ・乗りたいかった
- ・初めて体験しました。
- ・ヤマハさんの4人乗りに試乗させてもらい実際のスピード、乗り心地を体感できて良かった。

展示試乗会について

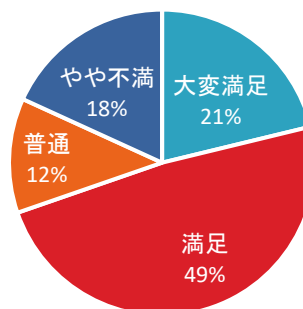


#### ⑤ フィールドワークについて

—ご意見・ご感想—

- ・EVへの体験運転ができたことがよかった。
- ・あまり参加できませんでした。
- ・漁業に携わる方の話が聞けたことはよかった。島内を一周してみたかった。
- ・漁業の方との会話は発見があった。
- ・さむかった。
- ・地元の方とふれあえるのはよい。もう少し島を周らないと見えないものが多いのでは
- ・多様な人たちとの交流
- ・足りなかった。もっと周りたかった。
- ・短時間で集中し、且つポジティブな思考で議論できて参考になりました。
- ・直接お話を聞いて良かったです。
- ・姫島の観光資源をもう少し見たかった。
- ・姫島を一周したかった
- ・フィールドワークの漁師へのインタビューは良かったが、良い所など姫島固有の良さがわかりにくかった。
- ・プチ観光&生の声が聞いて良かった。
- ・文面や人から聞くよりも、リアルに感じる事ができた。好きになった。
- ・もう少し回りたい。

フィールドワークについて



- ・もっと時間を割いて全島まわりたかった。
- ・もっと見たかった。

## ⑥ 姫島の今後の可能性について

- ・「誰かがやってくれる」の意識を変えることが大事
- ・移住も交流もニッチな分野にしぼり込むことで、姫島だけの魅力がわかりやすく外に伝えやすいと思った。それを切り口に知ってもらおう。
- ・色んな可能性を秘めていると感じました。島民の方のために本当に役立つ事が実現できることを願っています。そして、姫島が地域課題を解決するトップランナーになって頂きたいです。
- ・美しい地形やエビなど、特異性を活かして、持続してほしい。寺下さんを大切に支えてほしい。
- ・えび、ちょう
- ・可能性∞
- ・可能性がたくさんあると思います。
- ・変わる気があるなら変わる。受け入れるかどうか
- ・観光・文化の情報発信。エビを極める。他の食品開発
- ・キャッシュレス、エビ Pay はいけるかも
- ・車エビおしですすめてほしい。新しい風も必要かと思う。
- ・このワークショップを姫島の一般参加を募集したらいいと思う。
- ・コンパクトな島なので、ぜひ、全島スマート化の実証を。
- ・すばらしい、色々なコンテンツがあるので、人を呼べる。
- ・外から見ると宝の山。うまくアピールできるとすごい可能性あると思います。
- ・小さいエリアなので、実証フィールドとして期待できる
- ・島外にある資源、ない資源が多くあって、アイデア次第でどんな切り口でもいけそうでした。
- ・島民の人と、どうコミュニケーションをとっていくか課題かなと思いました。
- ・トップ・政権・体制の見直し。島民の入替（外との交流）がないと今後は厳しいのでは？（新しい血を入れる）
- ・ネクストモビリティの発信ができる島
- ・ポテンシャル高い。そして、もう実行始めている。想いをもった人がいる。目指したい姿にきつとなります。
- ・モビリティコネクテッドアイランドになるためには港が重要
- ・良い意味で閉鎖されていること。産業（車エビ）があることは、シリコンバレーのような街となる可能性を秘めている。
- ・よい発展をしたいと思います。
- ・リゾート化
- ・ワークショップでのアウトプット参照
- ・若手の活躍が鍵

## ⑦ 姫島の今後の可能性について

- ・AaaM!
- ・IoT、ネットワーク、クラウドでEV利用は可能と思う



- ・ MaaS×島×Princess
- ・ 新しい技術展開に期待。
- ・ 沖縄でも、できる！という可能性を感じた。
- ・ 技術がこんなに進んでいることにおどろきました。たくさんのわくわくする種類のモビリティがあれば、観光の手段ではなく、観光の目的になると感じました。
- ・ 倉本さんの話を聞いて、自分でつくれるんだとおどろいた。事業とか社会の何かに、つながらないかなと思った。
- ・ こういったWSを各地で開催
- ・ 公共公通の課題解決に質することが期待できる
- ・ コネクティッドカーとして多くの利用用途がある
- ・ これからの高齢社会に必要な
- ・ 実際に乗ってみることで、可能性を感じました。他の離島への展開がしたい。
- ・ 自動化・多用化
- ・ 島には似合うと思います。他にも展開できるところ、まだまだある。
- ・ そもそもモビリティの可能性（現状での）が分からないので難しかった。
- ・ 小さな交通に大きな可能性を感じる
- ・ 小さな町なので可能
- ・ 尖ったサービスが欲しい
- ・ どんなサービスと組み合わせるか
- ・ 費用と需要があうのか気になった。
- ・ 未来に必ずあると思います。
- ・ 夢を実現できるかが重要。実現したいですね。
- ・ ワークショップでのアウトプット参照

### ⑧ その他全体を通して

- ・ ありがとうございました。
- ・ お世話になりました。ありがとうございました。
- ・ 会津さんの全体の進行がとても気持ち良かった。
- ・ 貴重な機会をありがとうございました！
- ・ 全体として、すばらしかったが、もう少し時間がほしかった。
- ・ 別府湾会議に参加したいと思います

## 10. 運営を終えて

運営事務局  
公益財団法人ハイパーネットワーク社会研究所  
主幹研究員 加藤大和

ハイパーネットワークワークショップは、1993年から、別府湾会議と交互に隔年のペースで開催されており、今回で18回目の開催となりました。今回の開催地は、テーマにもあるように、現在、IT及びモビリティの活用で元気になりつつある大分県姫島村での開催となりました。姫島村では既に姫島エコツーリズムが中心となって、小型のEVを観光用に実用化しており、実際に試乗できる環境もありました。

開催に当たっては、離島という事もあって、移動交通手段や宿泊施設も都会のような利便さが期待できず、当初は参加の集客も厳しい事を予想していました。しかしながら、予想を反して、定員40人を大幅に超える79人の参加者となり、次世代のモビリティや地方の課題に対する関心度の高さを実感する事が出来ました。運営準備に当たっては、ITアイランド構想を進める姫島村に、会場の提供と大分空港送迎バスの多大な協力を頂き、今回は共催という立場で積極的に運営に参加頂きました。事務局として、大変感謝をしております。

また、予想を超える参加者を迎えるために、姫島村の各宿泊施設、飲食店にも多大な協力を頂きました。2月という開催時期にもかかわらず、多くの参加者が姫島特産の「車えび」を堪能しながら、遅い時間まで姫島の課題やモビリティの活用について、熱い議論を交し、交流を深める事が出来ました。結果として、参加者のアンケートでは、多数の方が「満足」との評価を頂いています。

最後に、広報に協力頂いた、大分合同新聞社をはじめとするメディア各社、地域の後援団体の皆様、また、多様なモビリティを展示頂いた出展企業各社、協賛を頂いた各団体の皆様には厚く御礼を申し上げます。

次回は2年後の予定ですが、今回のように産官学民の多くの方が一堂に会し、議論を行う事により、新しい技術による産業の発展と地域課題の解決に取り組んでいく所存ですので、皆様のご理解とご協力をよろしくお願い申し上げます。

## ハイパーネットワークワークショップ 実行委員会

委員長 青木 栄二 公益財団法人ハイパーネットワーク社会研究所 所長

副委員長 江原 和裕 西日本電信電話株式会社 大分支店 支店長

玉川 孝一 日本電気株式会社大分支店 支店長

監事 福田 巧 富士通株式会社大分支店 支店長

委員 安藤 善之 大分県商工労働部情報政策課 課長

運営事務局 河野 成典 公益財団法人ハイパーネットワーク社会研究所 事務局長

加藤 大和 公益財団法人ハイパーネットワーク社会研究所 主幹研究員

発行日／平成31年3月26日

---

ハイパーネットワークワークショップ実行委員会  
事務局 公益財団法人ハイパーネットワーク社会研究所  
〒870-0037 大分県大分市東春日町51-6 大分第2ソフィアプラザビル4F  
Tel : 097-537-8180 URL:<http://www.hyper.or.jp>